
緋弾のARIA × 特務零中隊

spas12K

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア × 特務零中隊

【Nコード】

N3480Z

【作者名】

spaces12K

【あらすじ】

警察直属でその存在を秘匿している組織『特務零中隊』。それに所属している人間と武偵とのお話です。

少しマニアックな銃が出てきたりもします。
後オリキャラ重視の傾向が少しあります。

オリジナルヒロインは『クドリヤフカ』をイメージしました。
オリジナル主人公はフルメタの『相良宗介』を丸くした感じです。

組織名は『特務零中隊』は大阪のSATの旧名。
組織は『ガンスリンガー・ガール』の『社会福祉公社』を参考。
何か他作品を寄せ集めた魔作品です。

行くぜ野郎ども！！

「めんどい任務やでこれは」

高速で移動するヘリの中、伸びをしつつ間拔けな声を出す。

「そうですね」

帰ってきたのは、これまた気が抜けた声。

「ルチアは相変わらずやな」

「そうですか？」

いつもと変わらないのんびりな少女ルチアは自分の武器を点検していた。

ZB26チェコの傑作軽機関銃だ。

腰にはVZ61スコープオン短機関銃、CZ75拳銃。

「お前、ほんまにチェコの銃が好きだな」

「ええゝまあ」

白く長い髪を揺らして肯定するだけだった。

ってまあ、人のことは言えず自分の持っている銃も相当マニアックだ。

Stgw510というスイスの前主力突撃銃だ。

アサルトライフルという部類に入るが『・308ウィンチェスタ
ー』よりも強力な実包を使う。

腰にはP210、もちろんこれもスイス製だ。

加えて値段がどちらも滅茶苦茶高い。

「それと、任務中はコールサインで呼んでくださいですよ」

「はいよ、ヴェスパ4さん」

「それで、よろしいですよ」。健介さん

「お前もコールサインで呼べや！」

思わず突っ込む。

「あい・さ〜、なのですよ〜」

適当な返事が返ってくる。

固い椅子にもたれて時計を見る。

「そろそろ時間やな」

「ですね〜」

その折だった。

「ヴェスパ3、4降下用意」

ヘリの機長が告げる。

「了解や」「了解ですよ〜」

その言葉を合図に、機体側部のハッチが開く。

そのまま飛び降りる。

続いてルチアも飛び降りる。

数十メートルの距離を慣性を受けて落ちながら目的の建物に着地する。

衝撃でコンクリが割れて屋上に大きなひびが入る。

「毎度すごい襲撃の仕方やな」

「ですね」

屋上の扉を探して素手でぶち破る。

「さあ、やりまつか」

「了解だ」

二人とも別々に移動する。

目の前のドアを開けると、黒スーツ姿の厳つい男が数人いた。

「誰や。どこの奴や!？」

こちらを向いて叫んだ男の体が穴だらけになる。

そのまま横なぎに7.5 x 55 mm のフルサイズカートリッジが吐き出される。

後ろの壁まで穴だらけにして男が全員倒れていた。

「相変わらず、この銃は強いなあ。惚れ直すわ」

そう呟いて、どんどん突き進んでいく。

次々と弾倉を取り換えて、銃撃の手を緩めない。

敵がいると思えば壁の後ろにいうが問答無用で撃ち殺していく。十階建ての建物の三階まで進んだところで奇妙な者を見つける。

「あちゃあ、やなもん見つけてもた」

ある部屋で不意に立ち止まる。

見つけたのは傷だらけの少女だった。

「お、まだ生きとるな」

首に手を当てると、まだ動きがあった。

傷だらけで周囲に血が飛び散っていたが、どれも死に至る傷ではない。

「本部か？ 女の子を一人助けたんや、回収へりに医者乗せとい
て」

「こちら本部、了解」

短いやり取りで通信が切れる。

「ヴェスパ4よりヴェスパ3へ、タゲは潰したよです」

「よーやった、ほな撤収しましょか」

「了解です」

その折、下の階から銃声が聞こえる。

「ヴェスパ4か？」

「私じゃないですね。武偵の子たちです」

「チっ、はようズラかるか」

あんまし面白くない連中が来たものだと思態つきながら、屋上
まで戻る。

ルチアは先に到着していて、へりの誘導をしていた。

その数分後に撤収は完了して空を飛んでいた。
少女を拾ったという変わったことがあったが、まあ上出来だ。

行くぜ野郎ども!! (後書き)

まったアリア関係なくでごめんなさい。

高・校・編・入 命令！！

「はあ！ そんな絶対嫌やで！！」

「命令だ」

「ホワイ！ 何でそんな命令が回ってくんねん！？」

「機密だ」

髭を生やしたの中年男が機械的に言った。

「それにヴェスパ3、ホワイではなくフォワイだ」

「んなもん、訂正せんでええわ！」

「いや、重要だ」

男はあくまで毅然として言い張る。

「だ・か・ら！ なんて俺が高校しかもく武偵高へ編入するんだ」

机をバンバン叩きながら講義する。

「がんばれ。ヴェスパ4とヴェスパ7も一緒だ」

もう決定された命令のようだった。

ついでに説明しておくヴェスパ1〜6はこの中隊での一人一人のサインだ。

ん？ 7？

「ストオオオッ！ ヴェスパ7って誰や！ いつ増えてん！
！？」

「昨日だ。そして昨日君が拾ってきた少女だ」

「ああ、あの子か？ それなら納得する……わけあるか！」

「うるさいなお前は、命令を出す遂行しろ」

「うえええい」

全身全霊で願っていたが――

目の前、天田中尉からの命令は絶対だ、従わなければならない。

「わかりやしたよ」

「素直でよい。そしてヴェスパ7だが君と同じ16歳。武器はロシア系だ」

「スペックと経歴は？」

「機密だ」

「？」

初めてのことで、いままでヴェスパは大抵の経歴とスペックは教えてくれた。

だが、今回は情報無しときた。

「まいつか。ヴェスパ着任は理由と信頼が込みやからな」

「そういうことだ」

そうこうしていると、入り口の自動ドアが開く。

そこに亜麻色の髪をした小柄な少女が立っていた。

「ライカ・スクリャロフ女史だ」

「よろしくお願いしま――へふっ」

入って来ようとして盛大にこける。

「見ての通りドジだが。うまくやってくれ以上」

話も終わったので、ライカと呼ばれる少女を連れて会議室を出る。その後いろいろ身支度をした後、専用の車で遠くの東京を目指す。

さらば大阪――

車内から小さく敬礼する。

と言うのもこの専用車窓は特殊ガラスで光が通らない、よって外は見えない。

車内も運転席とは隔離されていて、座り方も向かい合う形だ。

これは、車内でも会議を行つためだ。

今は三人の人間が中央のテーブルに銃を広げている。

俺はStgw57、90突撃銃とP210拳銃そしてSpecter短機関銃、SSG300狙撃銃。

ルチアはZB26軽機関銃、VZ61短機関銃、CZ75拳銃。さらにはZVI対物銃まで用意している。

ライカはAK74突撃銃、PP2000短機関銃、SVDS狙撃銃、スチエッキン自動拳銃。

V94対物狙撃銃まで用意している。

ここまで、よく装備が整えられたと感心しつつ、この先のことに頭を抱えるのだった。

高・校・編・入 命令！！（後書き）

すいません、まだ武偵が出ていません！！
しばらくお待ちを

武偵の実力を……

大阪へ東京間揺られること八時間。

新たな問題が、というか昨日からそうなのだが……

「えとお、金を貰えれば何でもする、極力人を殺すな、その他あ何だ？」

「いろいろあるみたいですよ」

手に持つ書類に目を通しながら、頭が痛くなるのを感じる。
中尉から渡された数枚の書類にライカも目を通す。

「むにむに、何でもいいですよ」

座席に横になって寝ていたルチアが投げやりに言う。

「お前は起きろ」

「康介さん私はもうそろそろ、飽きてきたです」

「お前、やつと俺の名前を正確に言っただな」

「あれ？ 私前回間違えましたか」

「ああ、前は『健介』って呼んだ」

「同じですよ、健介も康介も」

鼻から直すつもりはないらしい。

あつそつ、と言って再び書類を読んでいく。

「うりゆ？ コウさんは高校が面倒なんですか？」

「まあ面倒ってか武偵校っていうのがなあ」

康介が面倒くさがるのにも理由はある。

武偵というのは金さえ積まれば何でもするという点。

成人にも満たない男女が武装している点。

紛いなりにも高い戦闘力や特殊能力を有している点。

そのほか幾つかの点からさまざまな組織・軍から目を付けられている。

例えば、シールズ、G I G N、空挺スペツナズ……

かくいう自分達、零中隊も警戒している。

だからこそ康介たち三人を編入させたのだ。

任務は情報収集そして行動の妨害。

楽な任務ではなくすぐに終わるものでもない。

小耳にした話、最悪の場合は武力制圧の実行もあり得るとか。

まあ、他の国の特殊部隊に攻め込まれるよりは幾分ましだろう。

はあ〜と深い溜め息について書類を机に頼る。

「うりゃ〜、大変そうですね」

「だなあ〜」

笑っているが、こいつ等の御守りも頭が痛い。

何せ天然ゴーイングマイウェイの二人だ。

「どないしたもんかな〜」

「何が大変なんです〜」

またムクリと起き上ったルチアが呟く。

自分たち以外のヴェスパ達が行っても良いはずなのだから。

「普通の高校ではないが年相応の学生青春を送ってこい」

という中尉の言葉でこの三人に決まった。
カバンから板チョコを取り出してかじる。

そんな折、車が止まって扉が開く。

どうやら目的地に着いたようだった。

朝の眩い日差しの向こうに島が見える。

あそこに問題の武偵あるのだ。

新学期に合わせて編入したので三人全員が二年だ。

学部は都合上、強襲学部になっている。

各々が持つ銃器を詰めたバックパックや車輪付きのアタッシェ
ケースを転がす。

校門が見えてきたところで、無線機に通信が入る。

「こちらヴェスパ3、通信確認。オーバー」

「こちら本部。」

現在地点の近くに自転車に乗った学生もしくは武装された車両が
見えるか？」

「否定。確認できません」

「ヴェスパ3に指令。近くの建物の屋上より周囲を詮索し報告せ
よ」

「了解」

「ヴェスパ4、7は予定通り学校へ登校させよ」

「了解」

通信が切れる。

二人の方に向きなおって通信内容を説明した。

「じゃあ私たちはそのまま登校します」

「うりゅー、頑張ってくださいコウさん」

「ライフルは持つてといてな」

「りゃじゃ！ です」

ピシッと敬礼してライカが荷物を運んでいく。

手伝う気が皆無のルチャは先に進んでいた。

「さてと……」

手近なマンションを見つけてその屋上まで移動する。

慣れた背中の縦長の黒いケースから一つの狙撃銃を取り出した。

SSG―3000、御多分に漏れずこれもスイスの銃器会社に関係のある銃だ。

それを片手に双眼鏡で長方形の島を見渡す。

「あれやな？」

問題の人物はすぐに見つかった。

自分と同じ武偵校の制服姿の少年が猛烈な勢いで自転車を漕いでいる。

その後ろをセグウェイと呼ばれる乗り物が追いかけていた。

「ヴェスパ1から本部へ、対象を発見。指示を」

「可能なら救助せよ」

「了解。ですが何故ですか？」

「いくら武偵の生徒でも人であることに変わりはない。」

それに武偵全員が悪とは限らない。見殺しにすることはない」
「了解」

通信を切って狙撃銃を構える。

光学照準器を通して、その光景は鮮明に確認できた。

「あのセグウェイ、UZIをくっ付けとるんか」

なまじ速い動きゆえに捉えることが難しい。

距離と風と対象の移動先を考えて見越し射撃を行う。

弾丸は移動するセグウェイの少し前の地面を抉った。

「ちよい後ろか……」

そう思ったとき、信じられない光景が飛び込んでくる。

建物の屋上から少女が落ちてきたのだ。

低高度のパラシュート展開。

さらに体を一回転させて手と足の位置が入れ替わる。

太ももの銃を取り出して発砲。

見事にセグウェイを破壊して少年を自転車から引きはがす。

直後に自転車は爆発した、少年が必死で逃げていた意味も分かる。

「二人は？」

二人の後を探すと爆発地点から近くの倉庫。

武偵校の運動場近くの建物に吹き飛ばされた痕跡がつかえた。

「あれなら、助かったやろか？」

そう思った時、自転車の残骸の近くで数台のセグウェイが止まっているのを見つける。

「しめた、止まっとる今なら」

状況を確認しているのか命令待ちなのか、止まっている。目標に照準を合わせる。

引き金が落ち、弾が発射され、目標が飛び散る。遊底を前後させ次の目標を破壊する。

五発目を打ち終えて弾薬を再装填した。

もう一度覗き込むと、目標は消えていて、二人が吹き飛ばされた倉庫を囲んでいた。

「遠いな」

余り慣れていない狙撃であの距離は難しい。

そう考えたとき例の少年が入口から姿を現した。

躊躇無くUZIが火を噴いた――

そう見えた瞬間に全てのセグウェイが破壊されていた。

「何もんやねん」

言いつつ無線で本部へ通信を入れる。

「状況を知らせよヴェスパ3」

「少年は無事やし、敵も全て消滅したわ」

「なら良い。学校へ行け」

「了解、交信終了」

電源を落としてから薬莢を回収する。

時計を見ると始業式は既に終わっている時間だった。

「あちゃあ、初日から遅刻や」

幸先が悪いにもほどがあった。

この先のことを考えると本当に頭が痛くなる頃だった。

L e t S h o o t I t ! ?

「うりゆう、大丈夫でしたか？」

「大丈夫と言っちゃ大丈夫だったんだが」

自分たちが不思議な目で見られているのに薄々感じる。

それもそうだ、編入して来たのだから自分たちの顔を知る者はいない。

学期始めだけでも二年だから自己紹介もない。

「まあ、暇にはならんと思うけどな、ライカ？」

「うりゆう、そうですね」

ちなみに後ろの席のルチアは机に突っ伏してもう寝ている。

俺の荷物は女子寮の彼女達の部屋に置いてあるらしい。

時間に余裕がなかったので直接来てしまった。

背中に背負ってる縦長のケースも目立ってしまったている。

ふと、隣の生徒も机に突っ伏しているのに気が付く。

寝ている、というよりも落ち込んでいる。

どす黒いオーラが彼を覆っていた。

（話しかけ辛いな、おい）

右隣はライカだ。

「君は狙撃科の人？」

顔立ちの整った雰囲気の良い男が話しかけてくる。

「ちやう、強襲科や」

「へえ、そうなんだ。」

あ、僕は不知火 亮。君は？」

一瞬、関西弁に驚いたようだが特に気にしている様子はない。

「俺は豊和 康介や。よろしくな」

「こちらこそ、よろしく」

何気ない挨拶をしていると、活発そうな奴が付か付いてきた。

「俺は武藤 剛気な。よろしく！」

「お、おう。よろしくな」

武藤という男は横に突っ伏している男を指さす。

「そして、あいつが遠山 キンジ（とおやま キンジ）だ。
女嫌いで根暗だがまあよろしく、してやってくれ」

「はあ」

「んで」

武藤が近づいてくる。

「お前の左の可愛い子、名前なんて言うの？」

コイツ、本当はそっちが目的か？

「うりゃ？ 私？」

ライカが自分を指さして首をかしげる。

「そうそう、名前なんて言うの？」

「ライカです。よろしくです」

「そうか、ライカちゃんかよろしく」

武藤はどことなく嬉しそうだ。

もう一話題しようとしたとき、担任が入ってきて皆席に戻る。右と左はまだ机に突っ伏している。

「みなさん、席についてください。」

今日は転校生が来ました、って三人はもう座ってますか」

康介とライカ、ルチアの方を見て担任が確認する。

全員こちらを見て、ああなるほど、納得した。

「そしてもう一人の転校生を紹介しまーす。神崎・H・アリアさんです」

扉を開けて桃色のツインテール少女が入ってくる。

（あれは、さっきの女のか）

先ほどのことが思い出される。

「あたし、あいつの隣がいい！！」

入って来るなり、ビシッと指をさして自分の席を要求する。その指の先には、その声に驚いて飛び起きた男。

遠山が目を丸くしていた。

「はいじゃ、先生おれが変わります！」

遠山の横の席、康介と反対側の武藤が即座に手を挙げる。そそくさと武藤は席を移動し、そこに神崎が歩いてくる。

「これ、返すわ」

そう言って、遠山の机にドンツとベルトを置いた。

（ワオ、新学期早々お熱いな）

その光景に邪な想像をしてしまった。

「理子わかった！ これフラグバッキバキに立ってるよ！！」

「はあ？」

わけのわからない顔をする遠山。

「キー君ベルトしてない、そしてツインテールさんがそれを持ってきた。」

その謎はつまり！」

「「「つまり！？」「」」

全員が興味津々に聞く。

「キー君が彼女の前でベルトを脱ぐ何かをした！！」
「なるほど、つまりは恋愛中と」

不知火が納得したように呟く。

「なにいい！！」「影の薄い奴だと思ってたのに」「女嫌いじゃなかったのか！」「不潔……」

クラス中が騒ぎ立てる。

もう暴走状態だ、てか先生傍観してるし。

その騒ぎを断ち切る、鋭い銃声が幾度となく聞こえた。

「れ、恋愛なんてくだらない！ 全員覚えておきなさい！！
そういう馬鹿なこという奴は、風穴開けるわよ！！！」

開いた口がふさがらない。

（えらい、ビーバップなとこに来てもうたな）

と心から思うのだった。

夕方、ライカとルチアの部屋から愛銃をとって男子寮に来ていた。

「俺の部屋は、ここか」

ようやく自分の部屋を見つける。

中隊に居た頃のように一人部屋でないことを残念だと思う。
誰かと相部屋らしい、カードキーを通して中に入る。

「邪魔すんで」

そう告げて玄関化で靴を脱ぐ。

「どつぞ」

と、気怠そうな聞いたことのある声が返ってくる。

「ああ、遠山が相部屋なんか」

「よろしく」

愛想がねえな、と内心思うが気にしない。

特別人が悪そうでもないの、あまりあれこれ言わないことにする。

事前に教えられた部屋の間取りと一緒にだった。

とりあえず物置に荷物を入れて、クローゼットに服を入れていく。個別に四つ縦に並んでいる。

「たくさん銃を持っているんだな？」

暫くこちらを見ていた遠山は話しかけてきた。

「ん、まあ俺の愛銃やな」

「強襲科でも普通拳銃だけなのに、すごいな」

「そうかあ。まあ趣味みたいなもんやけどな。 ちなみに拳銃はこれや」

そういつて脇腹のホルスターからP210を抜いて見せる。

「俺はこれだ」

そいつて、銀色に塗装された銃を見せてくれる。
ベレッタのM92だった。

「悪くない銃やな」

「そっちこそ、とても高い銃じゃないか」

「せやな」

思ったほど無愛想でもないみたいだ、冷静な人物という印象も受ける。

「っと、銃の整備してもええか？　ちよつと今日使った奴があつてな」

「構わないが……装備科に頼めばいいんじゃないか？」

銃を取り出しつつ呟く。

「自分の命を預ける相棒や、人に触らせるくらいなら死んだ方がええ」

一瞬、遠山は驚いた顔をした。

「まあ、人それぞれだよな」

「せやで」

そう答えて、今日使ったSSG 3000を取り出す。

解体はしないで、銃身内部をブラシ付きの棒で擦り、遊底の可動部に油を差し込む。

光学照準器のレンズを特殊な布で磨き、銃全体を拭いていく。簡易メンテが終わった時にベルが鳴る。

「俺が出る」

そういつて、遠山が玄関へ向かっていった。

扉を開くと同時に

「遅い！　すぐ出なさいよ！！」

甲高い例のあの少女の声が聞こえてきた。

例の子、神崎はズカズカと部屋の中まで入って来るとテーブルを占拠した。

一瞬康介の狙撃銃を見てさらに上機嫌になった。
そしてこう高らかに宣言した。

「キンジ、あんた私の奴隷になりなさい！！」

「SMプレイか？」

スコーンと胡椒瓶が飛んできて頭に直撃する。

「何すんねん！？」

「あああ、あんたこそ何言ってるのよ！！　次は風穴開けるわよ」
「思ってたこと言っただけなのに……」

聞こえないよう小声でばやく。

「神崎、どういふことだ説明してくれ」

困り顔の遠山が説明を要求した。

その遠山を無視して今度はこちらに向かって来る。

「そのアンタ、その狙撃銃の口径は？」

今しがた整備を終えた狙撃銃を指さした。

「・308ウィンチェスターやけど。それがどないしたん？」

何故か神埼は笑みを浮かべている。

「あんた朝のチャリジャックを見てたでしょ？」

あのセグウェイ付近に落ちていた弾丸を調べられたか……
時間が無かったので薬莖だけを回収した自身に悪態をつく。

「さあ、しらんな」

あくまで、白を切ることにする。
なんとなくその方が身の安全を確保できそうな気がした。

「バレバレね。まあいいわ、あんたもついでに奴隷になりなさい」

安全は確保でき無さそうだ。

「まてまて、ついではないやろ」

「数は多くて困ることはないわ」

「俺の扱い雑いな、おい」

「ふう、それより客人に何か出しなさいよ」

会話が成り立たねえ。

「無視して話を進めるな！」

少し怒っているのか、遠山が声を荒げる。

「なんで、俺が奴隷なんだ」

「あたしには必要なのよ！ 強襲科に移って私の組むパーティに入りなさい」

「強襲科が嫌で転科したんだ。そもそも俺は武偵をやめるつもりだぞ。」

「私には嫌いな言葉がある『無理』『疲れた』『めんどくさい』」

この三つは人間の持つ可能性を押しとどめる良くない言葉。それに長期戦も予想済み。うん、て言わないなら……」

「「それに？」」

「泊まってい！」

「「はあ！？」」

「そして、出てけ！！」

アリアが机を叩いて立ち上がる。

「「Why！！」」

「分からず屋はお仕置きよ！ そとで頭冷やして来なさい！！」

強制的に殴りだされ、何が楽しいかは知らないが男二人コンビで時間をつぶす羽目になった。

大阪に帰りてえ！

相棒　くコーリシく

神崎に追い出された後、遠山と二人でコンビニで立ち読みをしていた。

「今日は厄日だ……」

「ほんま、そうやな」

げんなりして呟く遠山に、心の底から同意する。

「朝からひどいスタートだったぞ」

「まあ、遠くから見てたんやけどな」

「そうらしいな。助けてくれたのか？」

神妙な顔で遠山が訪ねる。

「二、三台あの車両を壊しただけや。

あの子……神崎がお前を助けんかったら、まあ死んでたやろな」

「そうか。でもありがとう」

「それは、あの子に言つてやり」

「……」

何故か黙り込んでしまふ遠山、まだ何か言いたそうだ。

それにしても、直接彼女に感謝を述べれない理由でもあるのだろうか？

「それで、見たのか？」

「？　ああ……」

見た、というのは、あれの事だろう。
俺は遠くから照準器越しに神崎の姿を捉えた。
同じく、遠山も振り返った時に神崎の姿を捉えた。
そして、神崎はパラシュートを操りながら、体の上下を入れ替えた。

当然その流れを見ていたわけで……

「ああ、見たんやけど。あれは、不可抗力やろ？」

「だが、あの状態の俺は……」

「言わんでええ。確かにいまどき純白の下着は珍しい。

せやけど見てもうた物は仕方ない。彼女には諦めてもらお」

「実は……って下着？ 何の話をしている？」

「いや、お前も見たんやろ？ そら空中で半回転したら見えてまうしな」

そう、彼女が体を半回転させたとき見てしまったのだ。

普段は周りを覆う布に隠れて見えない神域を。

高倍率の光学照準器越しに――――

「豊和？ 一体何の話だ？」

「神崎の下着の話やけど、お前も見ただろ？」

「……いや、その話では無いんだが」

「じゃあ何の話や？」

聞き返すと遠山は言うかわないか悩んでいる顔をした。
そして、何かを決心したように口を開く。

「その後の、倉庫から出たときの俺を見たか？」

「まあ見たっちゃ見たけど、人間離れた技やったな」

正直とても疑問に思っている。

人間離れたその動きわまるで別人のようなものだった。

「そう、そのことだ。できれば人に言わないで欲しい」

不思議に思った、武偵な自分の手柄を宣伝した方が仕事もランクも上がるはず。

それをわざわざ秘密にしたいとは、何か理由があるのだろうか？
だが、遠山の顔は真剣そのもの、あまり野暮な質問はしないことにしておく。

「別に他人の秘密を話す性分は持ってへん」

「なら助かる」

「ま、そんな事はええんやけど……」

「ああ……」

言葉の先を察したのか遠山も同じように溜め息をつく。

「あとちょいしたらアイツも帰るよな？」

半分希望を込めて呟く。

「だと思うが」

心細げに遠山も答えた。

立ち読みしていた雑誌を変えようとした時、携帯の呼び出し音が鳴った。

「もしもし、豊和ですけど？」

『どーぶるい・びえちーる、コウさん。今、お暇ですか？』

ライカの声だった、どーぶる……何だって？

『あ、英介？ ルチアだよ。ちよつと部屋まで来てくれない？』
「名前くらいキチンと憶えて欲しんだが？」

『あと、ライカの言葉の意味はくこんばんわです。』
ちよつとロシア語が混じってるみたいだけど気にしないで』

「普通気になるが……」

「んじゃ」

ブツッ、ツーツー。ほぼ一方的に電話は切られた。
遠山に振り返って言う。

「ちよつと、用事ができたわ」

「ああ、分かった」

遠山の返事を聞いて、コンビニを後にした。

相棒　くコーリシく（後書き）

呼んでいただきありがとうございます。

できるだけ原作を忠実にしようと思います。

質問があればお書きください。

感想待ってます!!

小さなすごい奴!!

「準備はいいんやな？」

「いいよ」「ぱじゃーるすた(どうぞ)」

女子寮の一室、カーテンは閉められ電気の明かりが部屋を照らす。

風呂上りなのか二人の髪が少し湿っていて、体も火照っていた。
バスローブ姿の二人はソファに座っている。

「後から文句は受け付けへんで？」

その言葉にルチアがふつと笑いを浮かべる。
同意したとみなしてライ力を見る。
こちらもコクコクと頷いている。

「じゃあ……行くぞ」

手のひらを握り締めて拳を作る。
一瞬の沈黙。

それを破るように三人が声を合わせる。

「」「じゃんけんポン!!」「」

三人の腕が付きだされる。
長い長い沈黙。

「うつわ、負けてもた!!」

「私も負けてしまいました」

康介とライカはパー、対してルチアはチョキ。

「にゅっふっふ、ではではアディオスです」

うれしそうに荷物をまとめて行くルチア。

「畜生！ 俺が一番帰りたかったんやけどな！」

「後から文句は受け付けない、って言ったの恭介のくせに」

勝ち誇った顔でルチアがガッツポーズをとる。
なぜこのような状況になっているのかというと。

先ほど、中尉から伝達が来た。

その内容は、三人のうち一人は帰って良いということだ。

中尉と副指令の少尉が検討したところ。

二人でよい。

そういう結論に達したらしい。

そして、その一人を決めるジャンケンが今しがた行われたのだ。

「そういう言うわけで恭介は部屋に戻ってね」

「へいへい」

用事も終わったので部屋を後にする。

あまり女子寮に長いもしたくないし、そろそろ頃合いだと考えたからだ。

「ばいばーい」「だすびだーにや（さようなら）」

二人とも手を振って見送ってくれた。

男子寮入り口にて、偶然にも遠山と合流した。

「何かあったのか？」

「や、なんもあらへんかった」

短い言葉を交わした後、部屋に戻る。

扉を開けて中に入る。

部屋の中は真っ暗だった。

「いない、帰ったのか」

「せやろな」

靴を脱い廊下を進む。

ふとバスルームから鼻歌が聞こえてきた。

嘘だろ！？

そう思っただけカーテンを開ける。

そこにはカゴに入れられた制服と二つの日本刀が置かれていた。

「遠山、あいつ風呂に入っとるで……」

絶望した目を遠山に向ける。

「ありえんだろ」

呆けたように呟く遠山、そこに不吉な呼び出し鈴が鳴る。
目配せをして遠山に見にいくよう指示する。

無言で頷き、扉まで忍び行く遠山。

すつと小さな穴から外を見る。

外に何者が居るのか確認した遠山がこちらを見る。

（居留守を使おう）

（了解）

目の合図だけでやり取りする。

戻って来ようとした遠山が段差に躓く。

「キンちゃんどうしたの！？ 怪我してない？」

扉の向こうから、濟んだ綺麗な声が聞こえてくる。
諦めて扉を開ける遠山。

「な、なんだよお前その格好は」

不安そうにバスルームを見ながら言うキンジ。

「あつ・・・これ、私授業で遅くなっちゃって・・・キンちゃんに御夕飯作って届けたかったから、着替えないで来ちゃったんだけど・・・いい、嫌なら着替えてくるよっ」

恥らいながら説明する少女。

「いや、別にいいから」

「ねえ、キンちゃん、朝出てた自転車爆破事件の周知メールって

キンちゃんのこと？」

「あ、ああ俺だよ」

遠山が肯定すると、奇妙な悲鳴を上げて少女は飛び上がる。

「だ、大丈夫？ 怪我とかなかった？ 手当てさせて」

手当という口実のもとに少女は遠山に手を伸ばす。

「俺は大丈夫だから触んな」

少女は少し残念そうにしたがやがって拳を握りしめて宣言する。

「でもよかったあ無事で」

それにしても許せないキンちゃんを狙うなんて！ 私絶対犯人を八つ裂きにしてコンクリ・・・じゃない、逮捕するよ」

さらりと怖いことを言う。

というか背後から何かすごいオーラを出している。

「それより用事はなんだよ？」

「あ、あのこれね竹の子ごはん作ったの、今旬だし」

それに私明日から今度は恐山に合宿でキンちゃんの御飯作ってあげられないから」

「お、おお、ありがと。よし、用事は済んださあ、帰ろうな」

用も済んで帰ってくれると思ったが、少女はなぜか一人で語りだした。

「い、一日に2食も作っちゃうなんて……」

な、なんか私お嫁さんみたいだね……って何言ってるんだろ私。
あは、あはは変だね。変？ 編！？
うん。キンちゃんどう思う？」

猛烈な勢いで凄い事を話し出す少女に遠山も押されている。

「わ、分かったからお引き取りください白雪さん」

何とか帰ってもらおうと必死な遠山。

今わかったが少女の名前は白雪というらしい。

「分かったって……それはつまりキンちゃんお嫁……」

その時風呂場で水の落ちる音がした。

「？ 中に誰がいるの？」

「中に誰もいませんよ」

と、その時少女と目が合う。

「キンちゃんその人だれ？」

「コイツは俺のルームメイトだよ。豊和 康介って人だ」
「そうなんだ」

目ざとく玄関の靴を調べる白雪。運よく神崎の靴は死角にあった。

「他には誰もいないの？」

「誰もいない！」

遠山と同時に声が出た。

「そう、よかった」

遠山がゆつくりと扉を閉める。

白雪が遠ざかっていく足音が聞こえる。

心臓に悪い時間だった気がする。

遠山も安堵の表情を浮かべたが、すぐに気を引き締める。

そう、まだ問題は残っているのだ。

素早くバスルームに移動する二人。

音もなくカーテンを開けて刀に手を伸ばす。

その折、神崎がバスルームから姿を現した。

「へ、へ、変態！」

「ちがう俺はこれを！」

「ちゃう俺はコイツを！」

そう叫んで遠山が刀を持ち上げる、その先にはトランプ柄のブラ

遅れて持ち上げた康介の刀の先には同じ柄のパンツがぶら下がっている。

「し、し、し」

わなわなと震えだす神崎。

「死ねえええええ！！！」

その後、氣を失うまで殴られた二人は朝まで目を覚まさなかった。

実力 そして 本名

「痛たた」

そこかしこが痛む体を摩って起き上がる。

目を覚ましたのは冷たいフローリングの上だった。

隣で遠山も寝ていた。

いや、気絶していた。

少しばかり腹も減っている。

あたりを見渡すと、昨晚に白雪が持ってきた竹の子弁当が見つかる。

「他人の物はあかんよな」

諦めて適当な物で朝食を済ます。

昨日出しっぱなしだった狙撃銃をケースに入れて物置に片づける。

代わりに少し小さな黒いケースを取り出す。

中から出てきたのはシテス社製短機関銃<スベクトラ Spectre>。

ミニ・ウージー程度の全長だが装弾数50発を誇る複複列弾倉を有する。

クローズドボルトで作動し、ハンマーをデコックして初弾をダブルアクションで発射可能だ。

イタリア製の銃だが少数がスイス軍で使われていたりする。

命中精度もよく旧式设计だが、現代の短機関銃にも引けを取らない。

その銃を背中の上着とカッターシャツの間に装備する。

拳銃は左脇の下、自分が一番取り出しやすいところにある。

時刻は午前五時。

登校にはまだちょっと早い。

遠山を踏まないよう注意しながら進み、靴をはいて武偵校へ向かう。

向かうのは教務部——武偵校の三大危険地域と称されている。

（元人殺しも居るとか言う噂やけど……）

もともと康介は警察機関の人間だ、武偵の姿は仮の物だ。
ゆえに人殺し等の罪人は見逃すことはできない。

武偵校へ編入したのは、そういった内部の情報を詮索するためだ。

「失礼します。2年A組の豊和ですが、担任は居られますか？」

扉を開けて中を見渡す、朝早い時間だが大勢の人間が中に居た。
ざっと、見渡していくが……

「はい、私が担任ですが」

「あ、先生。二、三質問があるんですが？」

「ええ、構いませんよ」

「ありがとうございます。聞きたかったのですが……」

あれこれと武偵について質問してる間に部屋の人間の顔を見ていく。

全員を見渡したところで折よく先生の回答も終わる。

「ありがとうございます」

「いえ、これから頑張ってくださいね」

「はい」

強襲科を後にして人気のないところまで歩く。
特にといった収穫は無かった。

噂とは尾ひれが付きやすいものである。

人殺し、というのは多分だが民間軍事会社の元隊員の事だろう。

日常で人を殺せば犯罪だが、戦争では逆に功績となる。

民間軍事会社は現在で言う傭兵部隊だ、おそらく彼らの事を『殺し屋』と言う噂が流れたのだろう。

人を殺している事に変わりはないのだが……

法律上の罪は無いので捕まえることはできない。

「装備科は昨日見たし、どっかでのんびりしよかな」

肩透かしを食らったような気がしつつも強襲科のある施設に向かう。

現在の時間は六時二十分。

やや小型の耐久性に優れたノートパソコンを開けて起動させる。

すぐに照明が付き暗証番号を入力する。

番号が認証されトップ画面が立ち上がる。

いくつかあるショートカットの中からプログラムを開ける。

この時間に本部から指令や報告書が届く。

暗号化されたデータが二つダウンロードされる。

別のプログラムを立ち上げて暗号を解読する。

特別な書式に変換されたデータを専用のツールで文章にする。

手間が掛かるが、機密を守るためなので仕方がない。

一つ目の文書はこういう内容だった。

「初日の報告書は目を通した。以後も定時連絡を欠かさぬよう。以上、健闘を祈る。」

追伸。極力怪しまれないため、武偵としての行動はするように」

昨日自分が出した報告書への中尉からの返事だった。

もう一つは自分が資料を要求したものだった。

「電子戦処理班より」

氏名 神崎・Holmes・アリア 4世

かんざき・ほーむず・ありあ

生年月日 ***年9月23日

身長143 体重??

補足情報

父親がイギリス人とのハーフ。自身はクォーター

ロンドン武偵局所属。尚現在は休職中

ランクは「S」

使用武器 M1911A1 スチールモデル/ステンレスモデル
各一丁

小太刀 二本

二つ名
「

そのほか大量の情報が記載されていた。
その中でも一番目を引いたのは……

(ほーむず? 四世?)

噂では聞いたことがあったが、まさか彼女の事だとは思っていなかった。

必要な情報を読んだ後、二つの文章データを完全消去する。

「なんや、えらいのに目え付けられてもたなあ」

道の小石を蹴飛ばして悪態を呟く。

小石の飛んで行った方向を見ると暇つぶしに丁度良い設備が見つかった。

屋外の射撃訓練場。

「標的を出す手目には……あれ、どないすんねやたっけ?」

機械を弄りながら悪戦苦闘する。
目標物を出現させるための装置があるはずなのだが……
さっぱり使い方がわからない。

「まあ、ええか」

呟いてポケットからコインを取り出す。

朝日を受けて銀色に輝くそれを親指で弾く。

高く空に打ち出された貨幣は大きな弧を描いていく。

「たとえ殺人者でも命は大事？　それが、人権？」

ホルスターから愛銃を抜き去り、撃鉄を起こす。

「せやけど、そいつ等は他人の人権犯してんねんで――」

一人呟き、引き金を落とす。

乾いた銃声。

放物線を描いていたコインに穴が開く。

そこで、誰かがこちらを見ているのに気が付く。

「誰や？」

振り返ると大きく黄色いヘッドフォンを耳に当てている少女が立っている。

背中には大きな狙撃銃、SVDドラグノフを背負っていた。
ライカの持っているSVDの原型となったモデルだ。

「狙撃科のレキです」

聞こえるか聞こえないくらいの小さな声でレキという名の少女は言った。

「俺は強襲科の豊和やよろしく」

「……」

返事はなく、少し頷いて答えとする。

正直、掴み所がない人物だ。

二つ隣の射撃スペースに移動したレキは自然な流れで背中の中を獲物を取り出す。

手元の機械を操作すると遠くの方に標的が出現する。

目算距離にして約五百。

市街地戦での中距離狙撃の距離と同じくらいの遠さだ。

「……」

何も言わず安全装置を押し下げ、初弾を装填。

そして、発砲。

燃焼された火薬のガス圧を利用して次弾が装填される。

遊底の動きに合わせて引金が引かれていく。

弾倉が空になると取り替えてまた撃ちはじめる。

話しかけても無駄そうなので射撃場を後にする。

遠山と神崎が一緒に登校してきたのが見える。

ちなみにライカは寝坊して遅刻してきた。

五限目になり各科の授業に代わる。

「遠山どないすんの？」

「俺はクエストを受ける。」

アリアはアサルトの実習中のはずだから、晴れて解放されるはずだ」

「俺もついてってええか？」

「別に良いが、何故だ？」

「俺もあいつとは関わりとうない……」

遠山の子承を得て二人で民間からの依頼をこなす事にした。
選んだのは、迷子の猫の搜索。比較的簡単そうなものだった。

（ホンマに何でもすんねんな）

遠山が探偵科で依頼を受け、さあ外へ出ようとした時だった。

「キンジ、コウ」

待ち伏せしていたアリアが出てきて、二人とも膝から崩れ落ちる

「何で……ここに居るんだよ」

「あんた達が居るからに決まってるでしょ」

「答えになってへん。それに授業はどないしてん？」

「あたしはもう、卒業できるだけの単位を揃えてるもんね！」

あつかんべ、と少し舌を出すアリア。

その仕草に少し可愛いと思ってしまったのに違いは無い。

だが、しかし！

いつ何時、二丁の銃をぶっ放して、日本の刀を振り回すかもしれない人物だ。

あと少しお淑やかなら、そう昨日の白雪ほど……

いや、あれはあれでヤバいかも知れない。

「それで、あんた達はどんな依頼を受けたのよ？」

「E、Bランクの武偵にお似合いの奴だよ。帰れっ」

遠山が面倒そうに手を振る。

その、遠山の言葉を聞いたアリアが不思議そうな顔をする。

「あんた、今Eランクなの？ そうしてコウはBランク？」

「そうだ、期末試験を受けなかったからな。」

どのみち俺にとって武偵ランクは関係ない」

「ちなみに俺はBで普通やと思うやけど」

「まあ、いいわ。ところで受けた依頼は何なの？」

「「お前なんかに教える義務はない」」

二人そろって言うと、神崎が二つの銃を太ももから取り出す。

「風穴開けられたいの？」

あまりにも言うことを聞かない神崎に、康介も堪忍袋の緒が切れる。

「額でタバコ吸うコツ、教えたらうか？」

目を吊り上げながら、神崎に拳銃の照準を合わせる。

一瞬にして修羅場と化する。

「Bランクであたしに勝つ気？」

「やってみるか？」

じりじりと間合いと機会を見計らう。

「ストップ、ストップ！ アリアも豊和も、落ち着けて。
アリア、今日の依頼は猫探しだ」
「ふ〜ん」

遠山が観念したかのようにバラしてしまった。
だが、簡単な依頼だ神崎も引き下がるだろう。
銃をホルスターに戻して、遠山と共に逃げるように歩き出す。
それを追うように神崎もついてくる。

「なんで、ついてくんねん？」

「あんた達の武偵活動を見せなさい」

「断る、ついてくんな。遠山も何か言ってくれや」

「奴隷のくせに口答えしない！」

「だから何で、奴隷なんだよ？ 俺も豊和も奴隷になった覚えはないぞ」

「あんた、私にあんな破廉恥な事していて、責任取らないつもり！？」

それに、昨日は下着まで取ろうとした！」

「あれは、不可抗力だろ」

いや、不可抗力でないのは確かだろう。

あの状況では怒られて仕方ないと思う。

武器を取り上げるのではなく、逃げることを選択すべきだったと後悔している。

「とにかく、私には時間が無いの。」

あんた達の行動を見て実力を測らせてもらっわ」

その後、どれだけ文句を言っても聞き入れられず、結局神崎が付いてくることになった。

実力　そして　本名（後書き）

いろいろ変なお所があると思いますが、目を瞑っていただけると幸いです。

居場所は火薬と硝煙の匂いの中に

夕闇に染まる街並み。

誰の目にも届かない世界、誰もが目を背ける世界。
そこに、自分たちは居た。

「こ、殺さないでくれ！ 頼む命だけは」

両手を上げて地を這いずり回る男。

その頭に亡霊の銃口スベクトラが向けられる。

無慈悲に貫通していく弾丸。

「あんたに殺された人も、そう思っただろうな」

屍に向けられたその言葉は、男の過去を語るものだった。

「こちらヴェスパ3、目標を制圧。次の指示を」

抑揚も感情も無い声が無線機に向けられる。

「本部より3へ、撤収しろ」

「了解」

短機関銃の弾倉を交換する。

廊下に落ちた空弾倉が任務終了の音を鳴らした。
血に染まった床を踏んで外に出る。

遠くに見える夜景と、今ここにある現状は本当に同じ世界にある
ものだろうか？

そんな事を考えても変わらないことは知っている。
けれど、考えずにはいられないのだ。

人として生きない人間。

それが蜂ヴェスパーと称される自分達の道。

建物を出て合流地点に歩いていく。

防波堤の上から見えたのは、紅く美しい夕陽。
それを背後に迎える船が来た。

安心にも似通った感覚を覚え、コンクリートの壁に両肘を立てる。

「……？」

誰かの呼ぶ声がして我に返る。

遠くには、いつの日か見たことがある夕陽が目に入る。

「コウ？ ちょっと返事しなさいよ！」

「ああ、神崎か？」

「アリアでいいわよ。ボーっとしてたわよ」

「いや、わりい。ちょっと考え事しててな」

「そう」

今いるのは防波堤の上、アリアはちょっと前にあるテトラポッド
の上に腰かけている。

キンジは、というともっと下の方で猫の捕獲に尽力していた。

今回の依頼報酬はすべてキンジの物と決めていた、あくまで康介
は付添い。

最終的な仕事はキンジが実行することになっていた。

「何を考えてたの？」
「昔の事だよ」

それ以上何も言わず遠くに沈む夕日に向きなおるアリア。
夕風を受ける長い髪と夕日に映えるその姿は、とても絵になった。

「アリア、俺とキンジを奴隷にしたいってのは、相棒としてか？」
「……そうとも言うわね」
「だが、相棒を作るのには時間がかかる。息を合わせる必要があるからな。」

お前は時間が無いといった、奴隷ならば息を合わす必要はない。
だから、奴隷なれといったのか？」
「仕方がないじゃない！」

アリアが怒りを抑えた震える声で言う。

「だが、ホームズと一緒にいたのは相棒だ、奴隷じゃない。
神崎・ホームズ・アリア、それは理解してくれ」

「あんた、何でそれを？」

「調べただけだ」

「速いわね」

「お褒めの言葉と受け取っておく。だが何故時間が無いと急ぐ？」

「それは……！」

話したくは無いらしい。

「詳しく話したくないのよ。でも、どうしても必要なのよ！
真実を探さなきゃならないのよ……！」

こっちを向いて怒ったように叫ぶ。

「言葉だけでも、思うだけでも、どうしようもない。世の中、道理は通らない。正義や大義は、ただの綺麗事。他人の力を我が物と考え、人を踏みにじる者がいる。そういう奴は真実を隠す、金や欲に目が眩む」

それを無視して彼女だけに聞こえるよう呟く。

「あんた、何が言いたいのか？」

「ある人の受け売りや。」

やけどな、お前の求める真実にちよつと興味がわいた。

つまりや……」

「つまり？」

「手伝ってやるよ」

「ほんとに!？」

「ああ、キンジはどうするかは知らんけどな」

嬉しそくに微笑むアリア、さっきまでの剣幕はどこかに飛んで行った。

やはり、女の子はこういう表情がよく似合う。

その折、下に居た遠山が尻餅をついた、どうやら猫に引っかかれたらしい。

依頼も無事完了して、帰路につく。

ふと思う、この判断は何に基づいて決めたのだろうか――

居場所は火薬と硝煙の匂いの中に（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

ちなみに亡霊はM4Spectreの事です。

スペクトラはイタリア語で『亡霊』という意味なので、このように表記しました。

彼と彼女の思惑

依頼を終えた帰り道。

用事があると言つて、遠山はどこかへ行つた。

アリアと二人で寮へ帰ることになる。

黙つたまま歩いていると、先にアリアが口を開いた。

「あんた、ここに来る前は何をしていたの？」

「大阪の方で武偵をやつてたんや、普通やろ」

真つ赤な嘘だつた。

自分はそこで零中隊と呼ばれる特殊組織で動いていた。それは今も変わらない、武偵の姿は仮の姿だ。

「ところで、背中の銃はサブマシンガン？」

「よう気づいたな。ご名答や」

時折コイツの洞察力には感心させられる。

背中の短機関銃は外からシルエツトが分からないよう、うまく隠していたのだ。

やはり、只者ではないのだろう。

「見たことない形なんだけど……ミニ・ウージー？」

「いや、イタリア製のM4 スベクトラ Spectreや」

「あんた、本当にBランクなの？」

「もちろんやで」

「信じられない気がするんだけど」

本当に鋭いと思う。

あまり、相手に話させるとボロが出る可能性もある。

「それより、遠山はどうするんや？」

「そうよ、あのバカよ！ あいつは何で奴隷にならないのかしら！？」

「色仕掛けでもしたらどうや？」

思い切り張り倒された。

「すみませんでした」

「わかれば良いのよ、あんなケダモノに色仕掛けなんてできないわ……！」

「まあ、あいつはマニアックな奴じゃ無さそうやしな。アリアの色仕掛けで成功するかどうかは……」

ドス！ ガス！！ バチーン！！！！

メリメリメリ <コンクリの壁にめり込む音>！！！！

「まじで、ごめんなさい」

「あんた、次言ったら、風穴開けるわよ……！」

「はい……」

ボロボロになった体を引きずって部屋にたどり着く。疲れたので、そのままベッドにダイブする。すぐに浅い眠りに落ちた。

やがてリビングの方が騒がしくなり目が覚める。

「一度だけだ」

それは遠山が降伏する瞬間だった

「一度だけ？」

「ああ、一度だけだ。強襲科に戻ってやるよ。

ただし組むのは一度だけだ。戻ってから起きた事件を一件だけ一緒に組んでやる」

「……」

「だから転科じゃない。自由履修として強襲科の授業に行く。それでいいだろう？」

二人が睨み合う。

わずかな沈黙の後、アリアが先に動いた。

「いいわ。その一件で、あんたの実力を見極めることにする」

「そうしてくれ」

アリアはソファから立つと荷物をまとめ始める。

「……どんな小さな事件でも一件だぞ」

念を押すように遠山が言う。

「そのかわり、どんな大きな事件でも一件よ」

それを言いくるめてしまうアリア。
中々達者だ。

「手抜きなんて、しないでよ」

玄関で振り向きざまにアリアが言う。

「ああ、全力でやってやるよ」

遠山が真面目な顔で答えた。

「なんやかんや言うて承諾したな」

「組むのは一度だけだ、それでアイツも諦めるだろう」

あくまでも、アリアとは組みたくないらしい。

「なあ、あの子が真剣に頼んでる。

そついう事を分かって言うてんのか？」

「……」

「いくら、なんでも可愛そつやろ」

難色を示す顔を見て不思議に思う、何か隠している事でもあるのだろうか？

「秘密にしている事があんのか？」

「人に話さないでくれると約束できるか？」

「当たり前や」

胸を張って答える。

言いにくそうにしていたが、ゆっくりと遠山が口を開いた。

「———ということだ」

「はあ、そらまた難儀な」

話を聞いて、開いた口が塞がらなくなる。
ヒステリア・モード

それが彼の持つ特殊な力らしい。
女性に対して性的な興奮を覚えることで発動する。

「せめて怒りや正義感が発動条件なら、よかったのになあ」

「本当にそう思う。それに武偵自体、俺は嫌なんだよ……！」

「なして？」

「それは……」

更にも増して神妙な顔つきになる遠山に、これ以上知らない方がいいと本能が告げた。

「言いたくないんならそれでええ。

深入りして済まなかった」

「いや、別に構わない。だが、そういう事なんだ」

遠山が落ち込んだように言う。

「もう、寝るわ。おやすみな」

「ああ、おやすみ」

ベッドに戻って、今度は深い眠りにつく。

次の日、久しぶりに見た悪夢に起こされるのだった。

彼と彼女の思惑（後書き）

ふと全話を読み直してみたのですが……
酷い出来でした、申し訳ないです。

自分事ですが今日新たに資料本を買いました。
「こんなにスゴイ 地上最強の特殊部隊」
何を読んでいるのでしょうか、自分は。

自分の立場

私服の上に黒く丈の長いトレンチコートを着て、時計を見る康介とライカ。

時刻は午前十時ごろ、建物と建物の間を器用に登っていく。三階ほどまで上がったところで、側面にある窓を開ける。音を立てずに内部に侵入する、続いてライカも中に入る。コートの裏側から銃を取り出す。

康介はM4 SpectreをライカはPP-2000を取り出した。

指を五本立てて一本ずつ折りたたむ。

最後の指が折れたとき、扉を開けて制圧作戦が開始される。

「ライカ、左回りで進んで。昇降口で落ち合おう」

「了解です」

背中を向けて別方向に移動する二人。

近くにあるドアを一つ開けて、中に飛び込む。

姿を確認される前に、銃の引き金を落とす。

中に居た四人の男は何が起きたのか分からないうちに倒れた。

銃声に気づいて駆け付けた男が、入り口で銃を構える。

横に飛んでかわす。

机の陰に一瞬隠れた後、机越しに射撃する。

薄い木の板を破って弾丸は男に着弾した。

男が倒れる音を聞いてから入口に移動する。

特殊反射鏡を使って外の廊下に誰もいないか確かめる。

一人、こちらに銃を向けている。

一歩また一歩と近づいてくる男。

銃を握り直そうとした瞬間に銃だけを突き出して撃つ。

頭と肩に当たり男は倒れる。

「ちょっと、手練れがおるな」

呟きつつ、インカムでライカに通信を送る。

「ヴェスパ7、進行状況は？」

「現在C - R - 4で交戦中。……制圧完了」

「昇降口にて合流しよう。次はD - Rを制圧する」
「了解」

その数十分後、建物の制圧は完了した。

一階の裏口からひっそりと外に出て、黒のコートを脱ぐ。
丸めて鞆に入れて、手に持っていた銃も入れる。

「とりあえず、連絡ポイントまで行こう」

「うりゅ、そうしましょう」

先程までの銃撃戦が、まるで何事でもないように何処かに移動する二人。

そう、彼等はそういう側の人間なのだ。

「制圧完了しました」

「そうか、初の近畿外での作戦だったが上々だ。

おっとそうだ、ヴェスパ2が現在そちらに向かっている。
目的は心神の受け取りだ。気が向いたら連絡してやれ」

「……気が向いたら連絡します」

そう返答して通信を切る。

伸びをして顔を上げた。

ここは、男子寮の自分の部屋。

「ヴェスパ2さんはどんな人なのですか？」

机を挟んで向かいのソファに座っていたライカが聞いてきた。

先程の通信は、中尉と康介、ライカの三人の間で行われていた。

「ちょっと、変わった人やねん……うん、ちょっとな……」

最後の方は自信が無くなってきて声がしぼむ。

「うりゅう、私の先輩さんなんですよね？ 会ってみたいです」

「会わない方が見のためやと思うで……」

彼女——ヴェスパ2は戦闘よりも操縦士としての腕が高い。
第一次世界大戦の複葉機から現在の第五世代戦闘機まで乗りこなす。

彼女に乗りこなせない物は無いと言われるほどだ。

だが、人格はと言うと……

いろんな意味でぶっ飛んでる、表す言葉が無いほどだ。

やりたい事は何でも実行する人間だ。

ヴェスパの隊員が寝ている間に、髪の色を絵の具で全部ピンクにするとか。

年下の隊員を人形にしたりするのはまだ良い方で。

酷い時には中尉や少尉にまで、ちょっかいを出すときもあるらしい。

「うりゃ？ ルチアさんは面白い人だと言っていましたよ」

「そりゃアイツだけや」

そう言いつつ、壁の時計を見る。

時刻は十二時四三分、そろそろ午後の授業が始まるころだ。

一応今日は休むと申請していたが、中尉からの指摘で午後は出席するようにと言われている。

「学校へ行くか」

「うりゅ、そうしましょう」

遅れながらも登校し、午後の授業を受けた。

そして、その日の放課後の事。

強襲科に自由履修に来ている遠山は、やたらと人に絡まっていた。

「おうキンジイ！ お前は絶対戻ってくると信じていたぞ！」

「いいぞお！ 楽しませてくれ！」

「お前の居場所はここしかないよー！！」

「ようキンジ！ お前みたいな間抜けでも相手してやるよ！」

そういう奴らを追い払って、強襲科を後にする遠山。

この後ゲームセンターに行くらしい。

行ったことの無い場所なので一緒に行く約束をしている。

肩を並べて歩いていると、門のところに特徴的なツインテールが立っていた。

言うまでもなくアリアだった。

「あんた、人気者なんだね」

「嬉しかねえよ」

「あたしなんか、ここでは誰も近寄ってこないの。」

実力差がありすぎて、誰も合わせられないのよ」

「なるほど、文字通り『アリア』ってことか」

「アリア、の部分を強調する遠山。
アリアが感心したように呟く。

「そうよ、『アリア』はオペラの『独奏曲』って意味でもあるのよ」

「ほんじゃあ、俺ら三人で『トリオ』ってとこか？」

思いついた小言を挟んでみると、以外にもアリアには好感触だったらしい。

「面白いこというのね、アンタ」

「そら、関西人やからな」

二人で笑っていると、遠山は一人スタスタと歩いていく。

「ちょっと、どこ行くのよ？」

「ゲーセンだよ、ゲーセン」

「げえせん？」

「ゲームセンターの略だよ。そんなことも知らんのか？」

「帰国子女だから、仕方ないでしょ」

ちなみに俺も知りません。

何せ市街地で活動するときにそういった店に出入りしたことが無いからだ。

やっぱり一般の人とは違うよな。

そんな事を考えていると、二人は自分を置いて口論しながら走っていた。

「え、ちょ、置いてかんといってくれ!!」

全力で二人の後を追いかける。

目的地に着いた時には三人とも息を切らしていた。

「なんで、こんな、疲れな、あかんねん」

肩で息をしながら悪態をつく。

「はあ、はあ、それは俺のセリフだよ」

隣でダラリと両腕を垂れている遠山が息も絶え絶えに言う。

「キンジが逃げるからよっ！！」

なぜか一人元気なアリアが遠山の首を絞める。

「ギブ、ギブ！　今やられたら死ぬ！　まじ死ぬ！！　すぐ死ぬ
！！！！」

口から泡を吹き始めたところで遠山は解放された。

店に入り、遠山がコインを交換してくるのを待つ。

アリアは一台の箱みたいないな機械に興味津々のようだ。

「これ、何？」

「俺も知らん」

「はあ、コウは日本人なんですよ？」

「まあ、俺にもいろいろあるんだよ」

何かを察してくれたのかアリアはそれ以上何も言わなかった。
また機械に向きなおる。

どうやらその中のぬいぐるみに興味があるみたいだ。

あれ？

次第に口が逆三角になっていく、よだれも垂らしかけている。

「それに興味があんのか？」

「……」

「もしもーし？」

「……」

遠山がどれだけ話しかけても反応しない。

「…… かわいいー……」

呟いたその言葉に、俺と遠山は笑ってしまった。

「やってみるか？」

と、遠山がコインをアリアに渡す。

「やり方が分からない……」

「教えてやるよ」

「本当！」

首をコクコクと上下させて頷くアリア。

「コウは何かしないのか？」

「ああ、俺？ あゝ、じゃあ、あれがしたい」

適当にあつた機械を指さす。それは射撃ゲームだった。

「したい、ってやり方知らないのか？」

「ゲームセンターには来たこと無くてな、まあ教えてくれや」
「ああ、わかった」

それから、遠山に簡単な説明を聞いた。
要するに画面に出てくる敵に向けて引金を引けば良いらしい。
遠山から貰ったコインを入れてスタートする。
次々に出てくる敵に向けて引金を引いていく。

「結構おもしろいな」
「ありふれたものだと思うが」
「珍しいねん。ってあれ？」

画面にRELOADと赤い文字が浮かび上がる、弾切れらしい。
手に持つ銃を確認するが、何処にもマガジンリリースが無い。
弾倉を交換しない銃なのだろうか

「……」

諦めて自分の愛銃、P210をホルスターから取り出して撃鉄を
起こす。

狙いを定めて……

「あほかあああー!!」

スパーン!! と思い切り頭をはたかれた。

「遠山、何で止めんねん？」
「実銃向ける奴がどこにいる!？」
「弾が切れてん、仕方ない」
「画面の外に銃を向けたらいいんだよ!！」

どうやら、康介は一般常識に欠けているらしい。

驚きの一面を見せた康介に遠山も驚きを通り越して、呆れている。

「お前、今度からゲーセン行くときは俺に声をかけろ。
危険すぎる」

「おう、そうするわ」

ハハハと豪快に笑いながら、後ろを振り向く。

アリアの方も面白い事になっていった。

貰ったコインの殆どをつぎ込んだにもかかわらず、景品が取れていない。

あ、コインが尽きた、どうするんだろう？

二人で見ていると、アリアは何処かでお金をコインに換金してきた。

あいつ、初めて来たんじゃないか？

彼女の並々ならぬ情熱は計り知れないようだ。

「あいつ、諦めるうちゆうことは無いらしいぞ」

「みたいだな」

「絶対お前を奴隷にするまで離さんと思うで」

「……」

容易に想定できたのだろうか、遠山が少し青ざめる。

「そーいや、お前は何でアイツと組んだんだ？」

「ん、雑多な理由はあるけど……まあSランクの武偵と組んで損は無いやろし……」

まあ、あの子の顔が真剣やったて言う理由もあるかな
「なるほど」

とか話しているとアリアが二回目の換金へ赴いた。
さすがに見かねたのか遠山が割って入る。

持ち前のプライドの高さから、離れようとしなかったアリアを遠山が押しのける。

一度ケースの中を見渡した後、どうやらターゲットを決めたいらしい。

二つのボタンを順に押す。

ピロリロリ、という効果音と共にアームが上がっていく。

二匹のぬいぐるみの胴体をがつり捕まえて持ち上げる。

うまい具合にタグと尻尾が絡んで三匹目がズルズルとついてくる。

そして、そのまま景品口から三匹の白いネコみたいなライオンみたいな顔が出てくる。

「お前天才やろ？」

「いや、偶然だよ」

「凄いやない、流石あたしの奴隷ね」

「奴隷になった気は無いんだが」

何故だろうか、他人が簡単に取ったのを見ると自分もできる気がする。

隣の換金機で千円札を崩し、台の前に立つ。

「おい豊和、壊すなよ」

「安心しろって」

そう呟いてボタンを押していく。

アームが移動して、スルスルと降りていく。

「……」

景品にかすりもしないで、戻ってくるアーム。

「い、今は練習や」

泥沼にはまる人の考えだったが、今の康介は考える由もなかった。

「……」

結局五回も台と換金機を往復することになった。
それでも、景品を得ることのできなかった。

朝焼けに映る敵の陰

いつもの時間、五時きっかりに目が覚める。

下の段で眠っている遠山を起こさないよう、静かにリビングまで移動する。

連絡用の端末を起動させ、電源が付くのを待つ。

起動が終わると、昨日分の報告書を作成していく。

毎日の報告書はその日の夜か、次の日の午前に提出することになっている。

数日分を纏める事も可能だが、毎朝作成するのが癖になっていた。前日の作戦における、消費弾薬や所要時間、その他様々なことを記していく。

そのついでに、ある一文を追加しておく。

ゲームセンターとなる所を、遠山、アリア、と共に視察。

「ふい〜」

文章を打ち終わったところで一息ついた。

二段階に分けて文書データを暗号化していく。

そして、出来上がった報告書を送信する。

時間にして二十分程度、まだまだ時間はあった。

愛銃の亡霊スペクトラを取り出して、各種動作を確認する。

コレを握っている時は、何故か一番冷静になれる。

「そっういや、ライカが羨ましがったなあ」

ヴェスパの仲間内で通っている愛称がある。

自分の愛称は『亡霊』、愛銃と銃を握っている時の様子から付けられたものだ。

戦っている最中は笑いもせず抑揚の無い声になる。

そして自分の愛銃は M 4 S p e c t r e、イタリア語で『亡霊』。ほぼ自動的に自分の愛称は決まってしまった。

「ケンカ売られてるようにしか思えんねんけどな」

どうやら昨日、ルチアがライカに愛称の事を教えたらしい。そして何故か、ライカはその愛称が羨ましいそうだ。

「ゆうてえ、あいつの使ってる武器から考えたらあ……」

暇つぶしにライカの愛称を考える。

それもすぐに飽きたので、紅茶を入れることにする。砂糖とミルクは多めだ。

加えて言うと、珈琲は今だ飲めない、あの苦さに耐えられないのだ。

それに珈琲は身長を促進を止めると言われている。

「アリアはコーヒーの飲みすぎで、ちっこいんかな？」

ふと頭に小学生程度の身長のアリアが出てくる。

あれ？ そういや、ライカも小さかったような……

二人が出会ったら比べてみても良いかもしれない。

アリアに殴られるのが容易に想像できた……

「あ、時間か」

六時二十分、指令文書や情報文書などが届く。

中尉からの指令、もっとも最近手紙のやり取りみたいになっている時もあるが。

「ヴェスパ3へ

東京に着いてからの経過は順調と見える。

なお、独断で『神崎・H・アリア』とパーティーを組むことにした件。

それは、武偵行動の一環と認識する。

特別何かを考える必要はない。

以上――」

まあ、勝手にアリアと組んだ件については不問という事なのだろう。

特に目新しいものは無かった。

続いてはライカ――ヴェスパ7の情報文書だった。

「電子戦処理班より

氏名 ライカ <本名は不明、所持物に記載されていた>

生年月日 不明

身長145 体重37 3サイズ - 69/51/72

補足情報

血液鑑定よりロシア人と東洋系の人間との混血と判定

言語や動作、戦闘経験以外の記憶は欠落。

肉体は改造された後かを発見、処置施設は不明。

使用武器 AK74突撃銃、PP-2000 短機関銃、

SVD狙撃銃、スチエツキン自動拳銃。

V-94対物狙撃銃

「

見ていて不審に思う、不明な情報が多すぎる。

（何もんやねん――）

いつも彼女にはこの疑問を抱く。

だが、天田中尉はヴェSPAに着任させた。

どこの施設で肉体強化されたか分かりもしないのに――

わずか数名の戦闘員にもかかわらず、部隊として成り立つ理由。それは、ヴェSPAの隊員は薬物と電気刺激、人工筋肉や機械化。複数の強化を肉体に行っている。

その強化手術が常人では成し得ない行動を可能にした。それ故に『中隊』の名を冠している。

「まあ、悪い奴では無さそうやねんけど……」

端末を閉じて紅茶を啜る、安物だが十分心を和らげてくれる。

「おはよう、早いな」

眠たそうに寝室を出てきた遠山が立っていた。

「まあ、朝は早い方やかな」

朝の挨拶を交わした後、朝食をとることにする。

遠山はコンビ二弁当の残り。

対する俺は、コッペパン・干し肉・干し野菜・塩・砂糖・水。あまり変わらない朝の献立だ。

腹六分目が何時でも戦える、それが康介の食事だった。

「……」

「どないした？」

「いや、何でもない……」

何故か俺の朝食を見て驚く遠山、美味しそうだったのだろうか？などと、的外れな思考をする康介が先に朝食を終える。

「朝はいつもそんな感じなのか？」

「まあ、大体同じやな」

やはり美味しそうなのか？

「それより今何時？」

「七時半前だ」

腕時計を見たキンジが告げる。

まだまだ余裕だ、いつもよりのんびりと登校準備を済ます。余った時間を読書に回す。

そろそろだろうという頃に、遠山も登校準備を終える。

「行こか？」

「ああ、行こう」

玄関で靴を履いて扉を開ける。

「アリアが居らんとちよい寂しいな？」

いつもより静かな雰囲気につい言葉が出た。

「はあ？ あいつが居ると朝から007の真似をする羽目になるぞ」

「なんやそれ？」

自分が居なかった日の朝について説明を受ける。

中々笑える内容だった。

他愛ない雑談をしながら、寮の門が見える所まで来た時だった。一台のバスが停車するのが目に映った。

「遠山、五十八分より前のは何分発や？」

「四十五分」

「そいつは絶対過ぎとるよな？」

「たぶん」

「……」

「「ダッシュ!!」」

同時に出た掛け声とともに駆け出す二人。滑るように門をくぐってバス停に着く。

しかし、その時すでにバスは武偵校へ向けて発進していた。シャツのネクタイを緩めながら落胆する。

「チャリで行くか？」

「生憎、始業式に星となった」

そいや遠山はチャリジャックに遭ってたわけ？
初日から運の無い奴だな。

「お前のチャリに乗せてくれ」

「そういや、持っていくの忘れてたわ」

一限目の遅刻が確定した瞬間だった。
その折、遠山の携帯が鳴る。

「もしもし？」

「キンジ今どこ？ コウはどこに居るの？」

電話の主はアリアだった。

「俺も、豊和も寮の門にいる」

「ちようどいいわ、C装備に武装して女子寮の屋上に来て！」

「強襲科の授業は五限目だろ？」

遠山が不思議そうに尋ねると、アリアが声を荒げた。

「授業じゃない、事件よ！ あたしがすぐと言っただろ！！」

何が起きたんだ？

朝焼けに映る敵の陰（後書き）

こんな作品にも目を当ててくれている人がいるととても嬉しいです。
本当にありがとうございます。

枢軸の怨念 伊・U

防弾ベストに強化プラスチック製ヘルメット、関節サポーター。その他、体中を固める。

C装備は武偵が突入作戦等で装備する物だ。

一瞬いつも着ている黒のトレンチコートを羽織るか考えたがやめた。

あれの方が性能は良いが、不自然だからだ。

「事件で一体なんや？」

「さあ、俺も事件としか聞かされていない」

全速力で女子寮の階段を駆け上がる。

屋上の扉を開けると見知った顔が三つ現れる。

三角座りで黄色いヘッドフォンをしているレキ。

背中にはSVD狙撃銃をしっかりと背負っている。

そしてアリアの横に立つライカ、彼女もまた大きな狙撃銃を背負っていた。

SVDの特殊部隊用改良型SVD Sだ。

ストックが折りたため、木製から樹脂へと変更され、精度と携行性が向上した。

どちらも精密狙撃には向かないが、動作の確実性と威力では言う事なしだ。

結構でかくてゴツイのだが、ライカの銃はグリップ角度が調整されている。

「体格に合ってねえな」

ぼそりと呟く、ライカは聞いてないだろうし、レキはヘッドフォ

ンをしている。

俺の声は届くまいと踏んでいたのだが……

「うりゃ？ セミオートの狙撃銃が使えない人の負け惜しみですか？」

「うおい、それ、誰から聞いた？ いや、あいつか」

瞬時にルチアの顔が浮かぶ。

一度締める必要がありそうだ。

「……」

聞こえているのか、いないのか、レキは相変わらず静かだった。誰かと通信していたアリアが立ち上がる。

「時間ね、この五人で追うわ」

「何を追うのか教えてくれや、リーダー」

「そうだ、状況説明くらいしろ」

「バスジャックよ」

「バスジャック？」

「武偵高の通学バスよ。あんた達の寮を七時五十八分に出た奴よ」

あのバスが？

「それにバスには爆弾が仕掛けられているらしいのよ」
「爆弾！！」

いち早くキンジが反応する。

この前の被害人でもあるのだ。

「そうよ、班員は武偵殺しよ！」

「だが、奴は捕まっただろう」

「真犯人は別にいるのよ！」

今は説明している時間が無いの、早く乗り込むのよ！」

ローターが風を切る音と共に一気のヘリが現れる。

武装は無いようだ。

素早く五人が乗り込むと、すぐにヘリは動き出した。

「見えました」

静かな声でレキが告げる。

「何も見えないぞ、レキ」

遠山が目細めて言う。

レキの目線の先を見ると確かにバスらしきものは見える。

だが、武偵の物が判断しかねるほど、小さい。

視力も強化されているので4・0あるが、それでもまだ遠い。

「レキ、お前の視力はなんぼほどあんなん？」

「左右共に6・0です」

返ってきた超人的な数字にアリア、遠山と顔を合わせた。
ずっと窓の外を見ていたライカが突然扉を開ける。

「何してんねん、ライカ」

俺が叫ぶのを無視して、ライカは背中中の銃を構える。
光学照準器を覗いた後、発砲した。

それに呼応してかレキも撃ちはじめる。
交互に途切れなく撃ち続けていく。

「何をしているの！？ 答えなさいよ！」

弾倉を交換しているライカがこちらを振り向く。

「バスの後ろに無人の車が数台追いかけていました」
「さらに、銃を積んでいました」

補足するように、レキが付け加える。

「ちよつと数が多いです」

「ええ、それにヘリの中からだと射角が」

何台か撃破したようだが、まだ数がいるようだ。
どこか適当な建物にライカを下すか？

「操縦士さん、あの建物の上を通過してくれや」
「了解です」

短い答えが操縦席から変えてくる。

「ちよつとコウ、何をする気なの！？」

「ライカを降ろすわ、いけるよな？」

「うりゅ、もちろんです！」

目標の建物も近づいている、落下傘を渡そうと振り向いたとき。
ライカがそのまま飛び降りようとする。
ヤバいって、それ特務中隊のやり方だから！

一般人に見せちゃダメだ！

「降下、はじめ（ナチャーラ）」

「ちょ、おい、パラシュート！！」

ロシア語を混ぜながらライカは降下する。

そして、盛大に着地する。衝撃で着地点の周囲に亀裂が入る。

「あの子、何者なの！？」

啞然としてアリアが驚く。

「まあ……すごい奴なんや」

「ああ、だが今度はこっちの仕事だぞ」

冷静に遠山が告げる。

こちらにもバスに近づいている、救出活動開始だ。

「あたし、キンジ、コウの順番で降りるわよ！」

「了解」

バスの真上ギリギリまで近づけて順に降りていく。
長物を使うレキはヘリの中に待機している。

「さてと、バスの屋上には何にもないが……」

おい、遠山車内に何かあったか？」

「いや、見つからない」

と、なると後はアリアの調べている車体下か？
だとしたら手が出しにくいが……

「あつたわ、バスの車体下よ！ 私じゃ手が届かない、誰か来て！」

「俺よりコウの方が降りやすいだろ、行ってくれ」

「あいよ」

手綱を屋上に打ち付けて降りようとした時だった、誰かが屋上に降り立つ音がする。

「誰や？」

振り向くと紅い尻尾が見えた。

だがそれは、一人の少女だった。

長く長い髪を後ろで一本にまとめている。

だが、その真剣な目は殺気に満ちていた。

手に握っていた銃をこちらに向ける。

T-33ソ連の拳銃、レベル2クラスのアーマーなら容易に貫通する。

「ちっ！」

Spectreを素早く取り出して撃った。

それよりも相手の動きが速い、拳銃を二発放ちこちらを牽制する。

牽制のせいですれた射線の隙間に入られた。

逆の手に小型のナイフが握られている。

こちらもナイフを取り出して応戦。

何とか間合いを離そうとナイフを斜めに薙ぐが、紙一重で交わされた。

腰をひねって繰り出された相手の付きを何とか回避する。

相手の太刀筋に気を取られていたせいで、回し蹴りが腰を直撃す

る。

無理な態勢で繰り出したのか、そこまで重くは無かった。
右足で踏ん張り車外に叩き落されるのを防ぐ。

「クドリヤフカはどこだ？」

「誰の事や？」

「知らないのか……」

一歩下がる少女、すかさず短機関銃の銃口を向けようと腕を持ち上げる。

それを、体全体をひねることで中断する。

少女がこちらに刀身を向けたとき、それが飛んで来たのだ。

「がつ、スぺツナズナイフか！？」

右肩が少し切り裂かれる、腕を持ち上げていたら確実に刺さっていた。

加勢に来た遠山の射撃に気づいた敵はバスから飛ぶ。
街灯の上に降り立ち、また飛んで見えなくなる。

「コウ！ あれは誰だ！？」

「わからん！！ やけど、たぶん敵や」

「あんた達、何してるの！？ 遅いわよ！」

いつまでも来ないコウに痺れを切らしてアリアがバスの屋根に戻ってきていた。

その、背中にライカの狙撃ポイントから死角を突くように一台の車が走ってくる。

「アリア、後ろや！！」

「えっ！ きゃっ！！」

無人のオープンカーから突き出たUZI。
そこから吐き出された弾丸がアリアに命中する。
屋上に叩きつけられて気を失うアリア。

「遠山、アリアを頼む！！ あの野郎！」

怒りに任せて残弾全てを叩きこむ。
エンジン部を破壊したのか車が炎上する。

「衝撃に備えてください」

無線機からレキのお落ち着いた声が聞こえた。
橋に出たバスに並走するようにヘリが飛んでいる。
伏射姿勢で狙撃銃を構えるレキ。

「おい、その銃は精密狙撃に向いてない！ やめろ！」

無線に向かって叫ぶが返事は無い。

「私は一発の銃弾——」

代わりに聞こえてきたのはその言葉だった。
直後に発砲音、爆弾装置一式が地面に落ち、そして海の中に落ちる。

最後に度派手な水柱が海中から立つ。
何とか、バスの爆破は未然に防いだようだが。
あの少女は？ そして、武偵殺しの正体は？
彼らの目的は？

新たな疑問が頭をよぎった。

ANOTHER：？　　く常夏の島でく　前編（前書き）

今回はオリジナルエピソードです。

少し変わった趣向になっておりますので、もしかしたら不快に思う方も居られるかもしれませんが。

ご了承のうえで、読んで頂けると幸いです。

ANOTHER：？　　く常夏の島でく　前編

飛行機に乗ること数時間、隣の国よりも遠いところにある島。暑さと湿気ですぐに服がべたつく。

「暑いわね、まったく」

肩に背負っているショルダーケースを地面に置いてベンチに座る。

「あの子は別の便で最初についてるはずだけど……」

あたりを見渡す、昼時だというのに人が少ない。サトウキビ畑が目の前に広がっている。視界が急に真っ暗になる。

「誰でしょう？」

「美佳ね」

「正解です。千恵姐さん」

振り返ると、自分の同僚が立っていた。ヴェスパ6・美佳、身長は普通くらい、スリムな体型。お淑やかで、冷静な少女だ。時に変わった行動をするが、中隊随一の狙撃手でもある。

「とりあえず、泊まる所を案内します」

「お願いするわ」

田圃を抜け、人の通ることが少ない道を歩く。しばらくすると、人気のある道にでた。

バスに乗り、ようやく活気ある街に着く。
そして、あるホテルに着く。

「下見した感じはどうなの？」

「狙撃地点も決めました。ここです」

地図を広げて美佳が説明を始める。

わずか二日間でもよく調べたものだ、と感心する。

「そして、回収地点はここ。夜中にここから船で逃げます。
あとは天候を待つだけです」

地図のあちこちを指さす美佳。所々に色分けされたマークが記されてある。

「上等よヴェスパ6。後は天気だけね」

「はい。それまでどうしますか？」

「とりあえず、作戦までは休暇みたいなものだ」と中尉は言っていたけどね」

天田中尉から指令を出されたのは一昨日の事だ。

内容はヴェスパ6の狙撃時の援護。

映画やアニメで狙撃手は一匹狼みたいに描かれているが実戦ではそうはいかない。

火力を補うために数人のチームで移動する。

今回の私の役目がそれだ。

「美佳は新入りのヴェスパ7と会ったことある？」

不意にした質問に、美佳の動きが止まる。

「いえ、まだ会っていません」

「今、東京で任務中らしいの、武偵として動いてるわ」
「そうですか」

素っ気ない答えだった。

「今回の任務は、結構危険ね。大丈夫？」

「はい、もちろんです。」

千恵姐さんも助けしてくれるので心配は特にはないです」

「そう」

飛行機の移動で少し疲れたのか、それでも考えすぎなのか。
まだ午後五時なのにもかかわらず、体が気怠かった。

「千恵姐さん、先にお風呂をどうぞ」

「ええ、そうさせてもらうわ」

勧められるがまま、風呂に入る。

服を脱いで、籠に入れていく。

疲れた体を洗い流して、その後はすぐに寝入った。

次の日の朝。

「今週は晴れの日だけらしいわ」

「そうですか……任務に支障が出ますね」

焦りと失望した美佳が嘆く。

「焦りは禁物よ、実力を半減させるわ」

「分かっております。ご忠告、感謝します」

容姿端麗で大和撫子の姿そのものである。

窓の外を恨めしそうに睨む横顔は、自分が男であったなら惚れていたかもしれない。

「今日は外でお店を回らない？」

ホテルの一階、日本食の料理店で朝食中に美佳に尋ねてみた。少し思案した後、美佳は口を開いた。

「外出するのは得策ではないかと思いますが……」

「でも、ホテルに一日中いるのは変よ。」

旅行者に紛れば大丈夫よ、その方が怪しまれないし」

目を閉じて考える美佳。

悩んでいるらしく、なかなか返事が返ってこない。

「千恵姉さんがそう言うなら。」

二人で観光でもしますか？」

「そうしましょう。」

仕事の合間に休息は必要なの、二人で楽しみましょ」

「はい」

朝食を食べ終えた後、地図を開いて今日のコースを決める。なるべく在日米軍人がいないところを選択していく。

「行きましょう」

「はい」

予定を決めた後、ホテルを出て市内を歩いていく。いくつかの観光名所を巡り、そこかしこの店のショーケースを覗いてホテルに帰る。

その、帰り道に一輪の花が咲いているのが見えた。

「綺麗な花ね、何て名前かしら？」

「デイゴの花だと思います、少し咲くにしては早いですね」

「そう、何でかしらね？」

「私達が来たからかもしれないね」

「どういう事かしら？」

「この花は『災い』が起きる前触れを予兆するそうです」

「確かに私達は『災い』を呼ぶわね」

「はい」

そう、今回の任務は米海兵隊隊員の狙撃だ。

下手をすれば戦争になるかもしれない。

対象の人間は、ここの土地で殺人を犯していた。

だが、日本で裁くことができない。

その身柄は本国に戻され、事件は有耶無耶やむやになるだろう。

これまでに、幾つもの事件がそうやって闇に葬られた。

彼らが数十年で起こした大小の事件は二十万件以上。

死者に至っては1千人を超えている。

それにも拘わらず、懲戒処分者が三百名ほど、軍法会議に欠けられたのは一人だ。

だが日本政府は大きく出ることができない。

だからこそ、自分たち特務中隊が動くしかないのだ。

「許せないんです」

不意に美佳が呟いた。

「奴らに、この土地を踏ませるわけにはいかない」

口調がだいぶ荒くなっている。

「熱くなり過ぎよ、冷静になさい」

「すみません、つい……」

この少女の気持ちはわかる、日本人としてこの事実を許すことは出来ないとも思っている。

だから、こそ失敗は許されない作戦なのだ。

「とりあえず帰りましょう」

「はい……」

取り乱したことが恥ずかしかったのか、返事に元気がない。

ホテルに戻って、報告書を作成し送信した。

後は、天候と日時の条件が揃う日をじっと待つことになるだろう。

「気長に待つことになりそうね」

「はい」

まだ彼女に元気がない。

そつと、近付いて後ろから抱きしめる。

「どうして、元気が無いの？」

耳元でそつと囁きかける。

「今、今日この日にも私は任務を遂行したいのです」

「そう思うのも仕方がないわ、でも今は時を待った方がいいのよ」
「分かっています、それでも……」

「今は寝なさい、それが今することよ」
「分かりました」

そう言つて、布団を頭からかぶる。

静かにはなつたが寝てはいないだろう。

自分も布団にもぐり眠ろうとする。

けれど眠れない。

仕方がないので、上半身だけ起こして壁を背にする。

枕を抱きしめて、うずくまった。

自然に今回の任務について考え始めてしまった。

「彼女を抑えてくれ」

中尉が言つたその言葉は、命令ではなく血の通つたものだった。

彼女は外国人に対してあまり好感を持っていない。

愛国心が強い面があるのだ。

武器はすべて日本製、弾丸までも日本製の物を使う。

剣道や柔道などの戦闘術だけでなく、茶道や華道、書道にも通じている。

容姿も端麗、物腰も穏やか。

中隊の中では一番技能が高く、狙撃の精度は中隊長の自分でも及ばない。

そんな万能完璧に見える彼女でも弱点はある。

外国人犯罪者に対して異常なほど攻撃的になる。

こんなこともあった。

中国人麻薬取引関係者の組織への襲撃時。

捕獲する相手まで射殺したのだ。

降伏していても関係なく殺していったのだ。

確かに自分たちが突撃した時には皆殺しが常。

しかし、情報を聞き出すときは一人だけ捕まえたりする。その時の彼女はまるで別人のようだった。

居合わせた自分も恐怖した。

「彼女だと米軍一個分隊を丸ごと潰しかねない。彼女が暴走した時は止めてくれ」

そう、自分は彼女が今回射殺予定の米兵以外の殺傷を止めるために来たのだ。

（この子はどうしてそこまで、憎むのだろうか？
そういえば、笑った顔を見たことが無いかも知れない――）

眠くなり頭がぼやける。

瞼が閉じて変な姿勢のまま、眠ってしまう。
次に目が覚めた時には朝だった。

「美佳、おはよう。って、あれ？」

美佳の寢床には誰もいなかった。

立ち上がって部屋を見渡してもどこにも居ない。
代わりに机の上に置手紙を見つけた。

『少し、行きたいところがあるので行ってまいります。
夕方までには戻ります』

読み終わると同時に、彼女の武器が置かれているかどうかを確認する。

狙撃銃は置かれていた、常時携帯する拳銃だけがケースの中にな

かった。

一人で暴れることは無さそうだ。

美佳の事は大丈夫なものとして、軽めの朝食をすます。

「さて、暇な今日この日をどう過ごそうか？」

天気は晴れ、夜になっても晴れだそうだ。

上空に雲が無いと今回の任務が実行できない。

衛星に姿を捉えられるからだ。

月明かりの届かない夜、その日に実行されるのだ。

目標の人間は夜、ある道を必ず通るらしい。

そこを狙撃。

後は回収ヘリと合流して本州へ帰るだけ。

「少し外で時間をつぶそうかしら」

自分のケースを開ける、中から出てきたのは89式小銃と9mm拳銃だった。

拳銃を取り出して、予備弾倉を持ち出す。

それから身支度を整えて、十分後には外を歩いていた。

日差しが眩しいのでサングラスをかけている。

「暇よね」

結局、日が暮れるまで大型の本屋で過ごしていた。

そのまま帰る気にもならず、適当な道を歩く。

人気を避けて、坂を上がっていくとどこかの岬に出た。

ふとさびれた公園に着く、その向こうには海が見える。

「綺麗よね」

錆びたブランコに座りながら、水平線に沈む夕陽を眺め呟く。
空気がおいしく、夕風も気持ち良い。

きーこ、きーこ、とブランコを揺らしていると、誰かが近づいてきた。

「誰？」

振り返ると、みすばらしい姿の小さな少女が立っていた。
手には使い捨てのカメラが握られている。

迷子の子だろうか？

「お嬢ちゃん、こんな時間に何してるの？」

「人を探してるの」

立ち止まり少女が答える。

「人を？」

「はい、ある人を探しているんです」

疑問に思って聞き返すと、少女はそれを肯定した。

「お父さんやお母さんかな？」

迷子なのかもしれないと思ってそう聞いてみたが、少女は首を横に振った。

「お父さんもお母さんももういないよ」

普通の事のように言う少女。

「ごめんなさい、変なことを聞いちゃったわね」

「ううん、いいの。」

それよりも、お姉ちゃんは武偵の人？」

「してないわよ。お嬢ちゃんは、武偵を探してるの？」

「うん」

「どうして探しているのかな？」

落し物が、何か調べものでも頼むのか、そう思って聞いてみた。

「私のお父さんとお母さんを殺した人を殺してほしいの」

「え——？」

驚いて、言葉に詰まる。

すぐに落ち着きを取り戻して、詳しい事情を聞いた。

「なるほど、そういうことね」

「そうなのです、だから探してるの」

ある日の夜の事。

家族で楽しく食事をしていた時だった。

ドアを壊して入ってきた外国人に、父親は頭を撃たれ死に、母親は弄ばれて殺されたらしい。

隠れていた彼女は生き残ったらしい。

その後警察の人も来たらしいが、結局事件は表沙汰にならなかったらしい。

今は孤児院で暮らしているらしい。

「でも、その人たちの顔はわかるの？」

「う、ここに写真があるの」

肩から下げているカエル型のポーチから、数枚の写真を取り出す。最初の数枚は風景が写っていた、途中で人の顔が写った写真になる。

角が居れて薄汚れていたが、そこに四人の男が写っていた。そして、その一人の顔に見覚えがあった。

「っ!？」

「どうしたの」

「いえ、何でもないわ。驚かせちゃってごめんね」

そうそのうちの一人は、今回のターゲット。

自分たちが狙う相手だった――

ANOTHER：？　　く常夏の島でく　　前編（後書き）

事件の件数、被害者数などは調べた限りの本物を記載しています。
多少の誇張はあるかもしれませんがご了承ください。

この話に関しては批判や質問を受け付けますので、思ったことを書いて下さって結構です。

物語は後編に続きます。

無くした過去 飛べない空 消えない傷

まぶしさに目が覚める。

見たことがある白い天井、丸い電球。

体を持ち上げるが、動かない。

どこにも力が入らない。

そして、自分が誰だかわからない。

ここは何処で、自分は誰なのか――

「新しい道を歩む覚悟はあるか？」

渋いが温かみのある声。

自分を覗き込むようにして一人の男が立っていた。

「新しい道？」

「人の道を外れ人間として生きる道だ」

「？」

「その身は戦士の体となる、そういう事だ」

この人が何を言っているのか分からなかった。
けれど、ここで立ち止まるのは嫌だった。

「歩みます」

「良い答えだ」

そう言って、男の人は静かに立ち去って行った。

瞼が重くなつて閉じる、ぬくもりが体を包んだ気がした。

「ん、ああ」

眩しさを感じて目を開ける。

腕や足はちゃんと動く、記憶もある。

「気分はどうだ？」

「良好です。主水先生」

ヴェスパの体を一般医に見せるわけにはいかない。
今自分は特殊な施設の中にいる。
隣に立っているのは、専門外科医の主水先生だ。

「傷の具合は？」

「戦闘に大きな問題は無い。一週間もすれば、違和感も無くなるだろう。」

「適切な処置、感謝します」

「例には及ばん、お前が怪我をするとは珍しいな」

「相手の中に手練れが、それも自分と同じような人間が居ました」
「能力者ではないのか？」

「否定です。そういった類の物ではなく、純粹に体が動いていました」

「そうか……。それよりもこの後任務があるらしいぞ」
「どういった内容ですか？」

「天田中尉の護衛だ。だが、装備は拳銃のみだそうだ。
着替えはロッカーにある。更衣後に移管室に行けばいい」

「了解です」

主水先生が出て行つたあと、室内のロッカーに用意されている黒のスーツに着替える。

あまり好きではないが、視線を隠すための黒のサングラスをかける。

（どこに行くんやろか？）

中尉も凄腕の人間だ、わざわざ護衛を付ける必要も無い気がするが……

何かあるのだろう。そうじゃなければ任務が来るわけがない。あれこれ考えるのをやめて尉官室に着く。

同じく黒のスーツにサングラスの天田中尉から簡単な説明を受け、車で移動する。

今回携行しているのはP226だ。

シングルアクションのP210はサイドアームズとしては優秀。しかし、拳銃のみを携行する場合はダブルアクションの方が好まれる。

すぐに撃てるからだ。

車で三時間ほど移動して、ある場所に着く。

新宿警察署――

中尉は今日はここの人間に会うらしい。

「公安0課の人間がいるかもしれない」

移動中の車内、天田中尉は突然こう言った。自分もその組織の事は知っている。

『人殺し』を認められた人間たちが集まる集団だ。
自分たちと似通っていると思う。

「彼等からの護衛ですか？」

「そうだ。特務零中隊は彼等には秘匿にされている。

ゆえに私の立場は便宜上、機動隊の警部。ヴェスパの隊員達は
調査だ」

「襲ってくるんですか？」

「まあ、わからんな」

彼らの、いわゆる武偵のランクは『S』だったはず。

相当に訓練を積んできた人間だという事は確かだろう。

「どうした？」

「いえ、彼らとやりあつて勝てるのかと、考えておりました」

「安心しろ、そのための君たちだ」

「分かっております」

そうヴェスパの体は日本を守る為に作られたもの。
そう簡単に負けない、負けるわけにはいかない。

「後、ヴェスパ・ライカの事なんだが……」

「何でしょうか？」

少し考えてから中尉が口を開く。

「お前はこの前の事件で、ある襲撃者にあつたそうだな？」

「はい」

彼女の事を思い出す、中々の手練れであつた。

身体能力も普通の人間のそれを逸脱していた。

「その時『クドリヤフカはどこだ?』と聞かれたそうだな?」
「肯定です。ですがそれが、ライカに関係あるのでしょうか?」
「お前は、ソ連の宇宙犬について知らないか?」
「存じません」

一瞬関係のない話のように思えた。

「詳細は省くが、その中の犬に『ライカ』という名の犬がいた。
別の名前では『クドリヤフカ』と呼ばれている」
「なるほど」

だとすると、あの赤髪の少女が捜していたのはライカの事かもしれない。

だが、そんなことがあるのだろうか?

「まだ噂でしかないのだが……」
旧ソ連の研究機関がヴェスパと同じ人体改造を行っているという話がある。

そして、その拠点が日本にある可能性が高いらしい」
「本当ですか?」

無言で頷く注意、おそらくほぼ確定した噂なのだろう。

「その上、そのことはロシアは好ましく思っていないらしい。
悪ければ、特殊部隊『アルファ』が制圧に来る。
最悪の場合は『空挺軍第45独立親衛特殊任務連隊』だ」
「空挺スペツナズ!?!」

ロシア最強の部隊だ、実戦経験豊富、老獪な戦術。
物量に任せるアメリカの部隊とは異なり巧みな行動をとる。
一番戦いたくない相手だ。

「空挺に来られると危ない。いかにヴェスパでも経験が違いすぎる」

空戦海戦とは異なり、陸戦は装備だけで勝敗は決まらない。
戦術や個々の技量、そして精神力も勝敗に左右する。

あのベトナム戦争での事だ。
最新装備の米軍は貧弱は装備のベトナム軍に勝てなかった。
自然の土地を上手く活用する戦法に多くの犠牲者が出たのだ。

「それは、避けたいですね」

「だからこそ施設を見つけ次第、制圧作戦を展開する」

彼らは危険すぎるのだ。

「さて、難しい話はこれで終わりだ。そろそろ着く。」

その数分後には、署に着いた。

中尉は署長と面会して様々な事件について話していた。

「はい、その女性については今情報を集めていますが……」

「政府に圧力をかけられている——か？」

中尉がウンザリしたように言う。

何時まで経っても政府の裏工作には手があまる。

金にしか興味が無い人間は心底腐っていると思う。

なぜ国民から税金を貰っている立場であそこまで偉そうにできる

のか？

——この組織が守るのは国民だ——
——国を売る役人ではない——

それが中尉の口癖だ。

「こちらも武偵の人間を中心とした隊を組織して捜査しているのですが……」

「金で動く彼らを信頼できるのか？」

「それは、その——」

中尉の問いだしに、署長がうろたえる。
それから数時間後、署を後にした。

車に乗って帰る際に、署の入り口にとある人物を見つける。
長い桃色の髪を二つに括った少女、アリアだった。
キンジも一緒である。

（署に用なんてあんのか？）

疑問に思いつつも零中隊東京支部まで戻った。

その日の夕方、寮に帰るとキンジが先に部屋にいた。

そして、アリアの額の傷と母の事を聞いた。

自分達が探していたパートナーではなかったと嘆いたことを知った。

無くした過去 飛べない空 消えない傷（後書き）

サブタイトルはあるゲームの主題歌の歌詞からとりました。
分かりますか？

何気に深い言葉だと思っています

消える飛行機雲（前書き）

ハイジャック編へ突入です

消える飛行機雲

「そうか、俺等は探していたパートナーとちゃうってことか……」

夕陽が差し込む部屋の中で俺と遠山はテーブルを挟んで向かい合っている。

どうやら、彼らが署に入って言った理由はアリアの母と会うためだったらしい。

そして、その母親は――

「懲役864年？ 不審な点が多すぎるやろ！」

机を叩いて苛立ちを紛らわす。

「だが、俺たちにはどうする事も出来ない。
これで良かったんだよ」

「……」

彼女の真剣なそして決意の宿った顔が思い浮かぶ。
あの自信ありげな出していた額を前髪を隠していたらしい。

「すまん」

手を離す。

自分だって本当は真剣に彼女の事を考えているわけでも無い。
あくまで興味本位だった。

任務で武偵として活動する、その一環として行っただけだ。

自分の立場はあくまで特務中隊。

彼女を心底守ろうとしたわけでも、全力で助けようとしたわけでもない。

その程度の覚悟だったのだ。

「シャワー浴びてくる」

「おう、痛くなかったか？」

「大丈夫だ、それにコウでも取り乱すんだな」

「ああ、まあ一応な」

少しだけ笑ってキンジは脱衣所に入っていた。
その日の夜はどことなく静かった。

――翌日――

自分とライカは武偵高の教室ではなく、羽田空港の第二ターミナルにいた。

（あれが今回の目標かな？）

（そうだと思います）

小声でライカと確認を取る。

いつぞやの黒いスーツ姿で手には大きめのアタッシェケースを持っている。

目の前を一人の少女を連れた、五十代中太りの男が過ぎ去っていく。

（うりゃ？ あの少女は指令書に写真がありませんでしたが？）

（たぶん、慰み者やろ。今回の標的は小さい子供に興味があるゆうてたし）

（なぐさみもの？）

（子供は知らなくていい）

政府関係者の人間。

約数十億円の税金の横領と、麻薬・売春の幹部だ。

自身はロリータコンプレックス。

国外への長期滞在を目論んでこの飛行機に乗るらしい。

護衛はいない、この機内で暗殺するのが任務だ。

（あの少女はどうしますか？）

（保護する。あいつが手を出す前に片づける）

ANA600便ボーイング737-350、イギリスのロンドン行だ。

ケースにはいつもの銃が入ってある。

約数分後には機内にいた。

「えらい、豪華やな」

「うりゅう、そうですね。ベッド（くらばーち）もフカフカです」

ベッドの上で飛び跳ねるライカ、今日は私服で青いワンピースだ。身長も仕草も幼いのでとても17歳に見えない。

というか、実年齢が不明だ。

本当に子どもかも知れないのだ。

「とりあえず着替えろ」

そう言つて黒のトレンチコートを投げ渡す。

こういった場所で軍人が来ているような特殊な服装は不便だ。

その点この黒のコートなら少し変だが気に留めない程度ですむ。任務の後は折りたたんでケースに入れておける。

このコートだけで防弾レベルは？ - A。

ちなみにヴェスパの象徴でもあり、儀礼的に着ることもある。

フライトから五分程度、そろそろ良い頃合いだ。

「ヴェスパ3から本部へ、作戦を実行します」

小型の衛星通信機にそう告げる。

「こちら本部、了解した。幸運を祈る」

ヴェスパ7を引き連れて、目的の部屋の前に着く。

聴診器を扉に当てて中の様子を窺う。

「突入」

低い声でそう告げ、扉を特殊機材で開けて中になだれ込んだ。

「ひいつ」

標的の男はベッドの上にいた、少女に覆いかぶさるように迫っていた。

二人とも全裸で、振り向いた男が乾いた悲鳴を上げた。

「そのまま、手を挙げてベッドを降りろ」

Spectreの銃口を向けつつ男を誘導する。

男は大人しく手を挙げながらベッドを降りて鏡の前に立った。

「お前たちは誰だ！？ 私は――」

何かを言おうとした男は倒れる。

後を追うように三つの空薬莢が床に落ちた。

「ヴェスパ3より本部へ、任務完了」

「こちら本部、よくやったヴェスパ3。

到着地点にヴェスパ4、5が待機している」

「了解。通信終了」

電源を切って保護した少女に話しかける。

「君の名前は？」

先程まで一糸まとわぬ姿だったが、ライカがバスルームより持ってきたバスローブを着ている。

怯えて震えている、やはり怖かったのだろう。

「……ボリク」

小さな声で呟いた。

白く長い髪にセピア色の瞳、小さな体に丸い顔。

「ヴェスパ7、この子を部屋に連れて行こう」

「分かりました」

少女を背負って部屋へ戻る通路を歩いて行く。

扉を開けて、一息つくとした時だった。

どこか遠くで、二発の銃声が鳴り響いた。

それは自分たちの銃じゃない――
招かれざる客が乗り合わせていたようだ――

消える飛行機雲（後書き）

そういえば、アニメ版で出てきた自衛隊の機体はF-15Jですね？

ミサイルはAIM-9ですよね？

映像で判断しきれないです。

誰かご助言があればお願いします。

空の上で

額に嫌な汗が浮かんだ。

この機はイギリス行、つまり欧羅巴の国々を通過する。
今あそこは、金融関係で揉めている最中だ。

（マルセイユの二の舞は踏みたかないで……）

加えてイスラム関係の動きも不穏。

今この国際便の中で自分以外の誰かが発砲した。
どこの組織なのか人数・装備は不明だが、よくない状況だ。

（制圧するか？ でも人質はおんのか？）

いくつかの疑問が頭の中を駆け巡る。

本部に連絡してイギリスの特殊部隊『SAS』に動いてもらうか？
それとも良い、が武装した自分たちも危ない。

その時機内の放送機器にスイッチが入った。

「a t t e n t i o n p l e a s e でやがります」

継ぎはぎの音声、どこかで聞いたことがある。

「当機は ハイジャックされ やがりました。
乗客は おとなしくしてやがれ です」

少し荒立つ言い方だ。

「なお 武偵は 例外で やがります。
相手して欲しければ 一階のバーに きやがれです」

頭の中で機内の地図を思い出しつつ一階へ向かう。

「ヴェスパ3より本部へ、応答願う」

「こちら本部。ヴェスパ3、どうした？」

「今搭乗中の機体に乗っ取られた。」

そちらの指示と乗客の中に武偵が居るか調べてほしい」

「了解、少し待て」

ハイジャック犯は『武偵』を指名した。

もし自分の事なら相手をすればいい、他の人間なら本部の指示を待つ。

「出ました。神崎という苗字の武偵が一人乗りこんでいます」

中尉の声ではなく通信士の声だった。

「ヴェスパ3、状況はどうなっている？」

事の成り行きを要点だけを抜き出して答える。

幾つかの質問のやり取りが完了して、行動が決まる。

「何がともあれ機体を奪還しなければならない。」

狙いが『神崎』武偵なら、お前に注意は向いてないはずだ。
射殺して構わない、必ず制圧しろ」

「了解、交信終了」

階段を下りて一階にあるバーの入り口までたどり着く。

耳を立てて中の様子を窺う、一人、二人……三人。

足音からしてそうだ、そして撃ちあっている。

絶え間ない銃声が室内から響く。

（あかん、すでに始まってた）

舌打ちして突入のタイミングを見計らう。

下手に入って流れ弾を被るのは避けたい。

中で誰かが高笑いをしている。

「あははは！ 勝てる！ 勝てるよ！ 理子は今日、理子になれる！」

何だ？ 何のことだ？

「きゃはは！ 狭い飛行機の中、何処へ行くっていうのー？」

誰かが反対側へ走り去っていく音が聞こえる。

「鬼ごっここの時間かなあ？ ちよつとだけ待ってあげよつかー？」

その声の様子から判断できる、この部屋の中にいるのが敵だと。
フラッシュ・バンの安全ピンを抜き、部屋の中に投げ入れた。
爆音と閃光が部屋中に響き渡る。

相手のくぐもった悲鳴を聞いて位置を特定し、突入。

うずくまり目を抑える相手の腕をねじ上げて行動不能にする。

「抵抗するな。所属と、部隊規模を言え」

低く押し殺した声で脅す。
捕まえたのは小さい女だった。

機内での攻防

捕まえた相手を見て少し驚く。
着ている服は少し形は違うが、武偵校の物だった。

「何故武偵が？」

何処かで見たことのある顔だ。

そう、確か始業式でアリアとキンジに茶菓を入れた女の子。

「確か峰とかいう奴やったな？ こんな所で何してんねん？」

相手をしつかり押さえつつ、問う。

「くっくっく、その声はコウだね？」

「黙れ。お前の他の仲間は何処にいる？ そして、何故ハイジャックをした？」

相手の嘲笑を無視して、肩の関節を外そうと腕に力をかける。

「甘いよっ」

「！？」

不意に彼女の髪が動いて、こちらを弾き飛ばした。
想像以上の力で、壁まで吹っ飛ばされる。

不意打ちだったが何とか銃は手放さないで済んだ。
素早く立ち上がって、カウンターの後ろに飛び込む。

「なるほど、コウの姿は武偵の服じゃないよね。」
「どういう事なのか理子りんに教えてくれないかな？」
「お前の墓前で教えてやる」

カウンターから身を出して銃口を頭へ向ける。

そのまま引金を引くが、飛行機がいきなり揺れて銃弾が逸れた。

「武偵法9条を破る気なのかな？」

「もとより守る気はあらへん」

余裕気につぶやく理子に再び銃口を向ける。

「ふーん。私はそのコートを着ている人たちの噂を聞いたことがあるよ」

「ほう」

髪の毛をつねらせながら、さも楽しげに笑う。

「確か、特務中隊と言ってたっけ？ 私の知り合いも結構やられちゃったんだよね」

「じきにお前もその一人になるわ」

「でも、私だけに構ってていいのかな？」

「どういう事や？」

引金を引こうとした時、無線インカムに緊迫したライカの声が割って入ってきた。

「康介さん！ 部屋まで戻ってきてください！ 新手が――」

いきなり交信が途絶える。

「どうしたヴェスパ？ 応答を」

「ノン、ノン、よそ見はダメだよ！」

無線通信に気を取られた一瞬に銃をこちらに向けた理子が言った。そのまま発砲してくる。

カウンターの後ろに隠れてやり過ごすが、部屋の外に逃げられた。

（どちらに行けば？）

おそらく理子が向かったのは遠山とアリアの方だ。こちらはライカが危機に陥っている。

（遠山、アリア、任せたで……）

そう心で念じて、来た道を急いで戻る。

部屋まで戻ると扉は開け放れており、腹部に刃の刺さった少女と、拳銃を構えるライカ――

そして、あの紅い髪の女がいた。

「伏せるライカ！」

部屋の入り口に立つ自分と相手を挟んで対称点に立つライカに叫ぶ。

ライカが伏せたのと同時に両手で保持した短機関銃が火を噴く。左肩に数発あたり、相手が倒れる。

狙いを頭に定めて撃とうとした時、また飛行機が揺れた。

「ちっ、なんでも！」

紅い髪の少女は立ち上がりこちらに走ってくる。
同時にナイフも飛んで来た。

「二度も同じ手は喰らうか！」

わずかに身をかがめるだけで、それを回避する。

（速い！）

この一瞬で相手は目の前まで迫っていた。
銃を鈍器にして叩き下ろす。

鈍い音と共に紅い髪の少女の動きが止まる。

首の近くを、グリップ下部を思い切り叩きつけた。
普通の人ならその場で倒れているはずだが、少女は立っている。
だが、気絶しているのか目の焦点が合っていない。

「負けられないっ！」

歯を食いしばりながら、こちらの腕を両方とも掴んで持ち上げる。
信じられない力だ。

「うっ、っく！」

力を振り絞るが敵わない。

振りほどこうとした時、腹部に衝撃が走る。

至近距離での猛烈な蹴りだった。

俺を蹴飛ばした少女はそのまま、部屋を飛び出して何処かへ走り去った。

「逃がすか！」

蹴り飛ばされたときに短機関銃は何処かに弾き飛ばされた。

拾う時間ももどかしく、拳銃をホルスターから取り出して後を追う。

少女の蹴りは相当の力があり、足がふらつき目が少し眩む。

それでも何とか、飛行機の搭乗口にいる少女に追いつくことができた。

背中に落下傘の入ったバックも背負っている。

左腕は動かないのか垂れ下がっている。

相手を行動不能にするため、右肩を狙って銃を放つが外れた。

銃声に気付いた少女がこちらに向かって突進してくる。

更に発砲して二発が太腿に当たるが、構わず向かって迫る。

発砲させないため、少女は康介の右手の銃をスライドオープン状態に掴みあげた。

両者そのまま膠着状態になる。

「邪魔をしないで！」

「銃を持って暴れる限り、俺はお前を倒さなあかん」

「あなたは何故戦う？ 理由も無いのに私を邪魔しないで！」

「そういうお前は何のために戦う？」

「私は守るべき者のために戦う!!」

叫びながら俺を突き飛ばして、扉を開けて機外へ少女は飛び出した。

スライド式のドアはすぐに閉じて、後を追うことは不可能だった。

突き飛ばされたとき、床に叩きつけられたせいかわ、妙に頭が痛い。よろける体を何とか立ち上げたとき、激しい衝撃が機体を揺さぶった。

機内での攻防（後書き）

すいません、出来がとてまいちです。
次回はもっと、綺麗な文にしたいと思います。

伊・U の贈り物

飛行機の高度がどんどん下がっているのが分かる。

「ヴェスパ7からヴェスパ3へ、先ほどの少女は？」

無線が回復したのか、ライカから通信が入る。

「こちらヴェスパ3、機外に逃げられた。そちらの状況は？」

「私は平気です。救助したボリクという少女は刃物による傷を負っています」

「程度はどのくらいだ？」

「傷は浅く、今は布で止血しています」

少女が死ぬ心配はなさそうだ。

「分かった、俺は今から操縦室へ向かう」

「了解です」

通信を終了して、操縦室へ向かう。

遠山とアリアが理子を倒したかどうか分からない。

だが、高度が下がる飛行機を持ち上げる必要もある。

扉を開けて操縦室に入ると、先に二人の人間が座っていた。

「コウ？ どうしたのその恰好？」

康介の黒いトレンチコート姿を見たアリアが驚く。

「説明は後です。それより理子はどうした？」

「外に逃げられた。それよりも良くない状況だ、内側二つのエンジンをやられた」

いつにもまして冷静なキンジが静かに言った。

「爆発物が積んでいたのか？」

「いや、ミサイルだ」

「ミサイル？」

「伊・Uからの贈り物だそうだ」

「伊・U？」

「それこそ後で説明する」

そこで疑問に思う。

もし本当にミサイルなら、翼が吹っ飛んで今頃自分たちはお陀仏のはず……

爆薬を抜いてあった物なのか？

それともあるいは不発だったのか？

そこに、遠山の持つ無線機に通信が入る。

「ANA6000便、こちらは航空自衛隊、中部航空方面隊司令部だ」

無線機から野太い声が聞こえた。

「羽田滑走路は現在トラブルにより使用不能。」

誘導機に従い、太平洋上に進路をとれ」

コックピットの窓の外に二機の戦闘機が現れた。

遠山と無線の相手が口論している間に、室外に出る。

そして、本部に通信回線をつなげた。

「こちらヴェスパ3、本部へ応答を願う」

「こちら本部、ヴェスパ3状況を知らせる」

いつにもまして緊迫した声で天田中尉が言葉を発する。

「ハイジャック犯は撃退した。」

しかし、今度は自衛隊の航空機が張り付いている」

「何機だ？」

「確認しただけで二機」

「機種は？」

「たぶんF15だと思うが」

「そうか……」

何か含みのある言い方だ。

「今、少し悪い情報が入ってな。」

領空侵犯の飛行機が二機太平洋側から日本へ入ってきたらしい。

同時にその空域にいる旅客機が制御不能に陥いり、その期待にミサイルが命中した。

事態を重く見た自衛隊は、領空侵犯機の撃墜を決定。

第七航空団の百里基地から五機のF15戦闘機、RF4偵察機が

三機が出撃した」

中尉の情報を聞いて手に汗が浮かんだ。

「じゃあ、この旅客機のそばにいる戦闘機は？」

嫌な予感がして、心臓の鼓動が速くなる。

「自衛隊の航空機でない可能性が高い」

最悪の言葉だった。

空を駆けて

この旅客機を誘導しようとした戦闘機は敵。

先程から話題に上がっていた『伊・U』に関係があるかもしれない。

「ヴェスパ3から本部へ、何とか外の機体を追い払う方法は？」

その時、本部との通信に一本の回線が加わった。

「やはー、ヴェスパ3、元気してる？」

場の空気にそぐわない、朗らかな声だった。

「ヴェスパ2、今俺が大丈夫なように思えるか？」

「ごめんごめん。」

と、その話はさておき、要はその纏わり付いてる奴を追い払えばいいんだよね？」

自信ありげな声が無線から聞こえる。

「それは、そうなんだが……あんた、今どこだ？」

「もち、空を飛んでるよ」

そういえば、ヴェスパ2も何か用事があって東京に来ていた事を思い出す。

確か、新型戦闘機の受け取りか何とか

「ヴェスパ2、今戦闘機に乗ってるか？」

「よく分かったね、その通りだよ。
ちなみに後、一分ほどで有視界距離に入るよ」

安堵にも似た感覚を覚える。

ヴェスパ2は性格こそ問題があるが、操縦士としての腕は一流だ。
新型の戦闘機に乗っているならば、F15に負けることは無いだろう。

「よかった、所属不明機の撃墜を頼む」

航空自衛隊の到着まであと数分は掛かるだろう。
それよりもヴェスパ2の到着の方が速い。
これで何とかなる、そう思った。

「ああ、撃墜は無理だよ」

「えっ!？」

あっさりと拒否された。

「何故だ？」

「私の乗ってる戦闘機、武器が無いもん」

聞けば、受領した『心神』はステルス性能やエンジン性能の実験型らしい。

武装は全く無いらしい。

「じゃあ、どうする気だ？」

先程の自信ありげな主張を再確認するよつに問う。

「撃墜は無理でも、旅客機から引き離すことは出来るよ」

「武器もないのか？」

「まあ、コックピットから見ててよ」

通信が途切れ、本部とも更新を終了して操縦室に戻る。

「あんた、こんな時に何してたの！！」

最初に飛んできたのはアリアの怒声だった。

「すまんちょっと機内の確認をしてきた」

適当な言い訳をしてみます。

「遠山、この機は今どこへ向かっている？」

「東京へ戻るルートだ」

遠山の落ち着いた、声が返ってくる。

「やったら、そのまま羽田に向かってくれ」

操縦席に座る二人が驚いた顔をする。

「今羽田の滑走路は使えないって言ってたじゃない」

「あれは嘘のはずだ」

そこに、操縦席の通信機に新たな無線が入る。

「誰だ？ こちらの指示に従い太平洋上に進路をとれ」

さきほど、中部航空方面隊司令部を名乗った男の声だった。

「俺は豊和だ。」

貴官に問う、どの基地に所属の機体が誘導機として来ている？」

「……」

すぐには返答が無い。

「小松基地所属の機体だ」

少しの間をおいてからの返答、その答えは嘘の物だった。相手には聞こえない小声でアリアとキンジに話しかける。

「無線の相手は嘘をついとる、外の機体も自衛隊の物やあらへん」
「だがそれが分かってても、どうしようもないぞ？」

遠山が外の機体を横目で見た。

「それは……」

口を開けかけたとき、こちらに向かってくる黒い影が見えた。現れたその影は、外にいる戦闘機の真下を通過する。

突然の事に、この旅客機を見張っていた戦闘機は大きく旋回していく。

その影は、ヴェスパ2が乗る心神だった。

「何だあの機体は？ まさかF-X？」

遠山が驚いたように言う。

「それよりも見て！ 二機ともあの機体を追ったわよ」

もう片方の所属不明機も心神を追って、機体を大きく右に旋回させた。

今、この旅客機は安全な状態になった。

「今のうちに進路を羽田に」

「分かったわ」

アリアが操縦桿を動かしていく。
進路が羽田空港に向けられる。

「でも……」

アリアが不安げに口を開く。

「着陸なんてできるの？」

「難しいが、この機体は運がいい。
燃料が漏れているおかげで機体も軽くなつとる。
後は神のみぞ知る、や」

最後の問題はどうか着陸させるか、だ。

アリアは小型機を操縦できるそうだが、自分たちは専門外だ。
一人の少女に全てを委ねて固唾をのむ。

「待て、あれは何だ？」

前方を見ていた遠山が目を細める。

その何かは、雲の隙間から姿を現した。

二機のエンジンを最大限に稼働させ、真上を通過していくF15。その垂直尾翼には鷲の部隊マーク。

「第204飛行隊や！」

後方で格闘する所属不明機に殺到して行く、五つの銀翼。新たな通信が入った。

「600便、応答を」

窓の外には、RF4偵察機が並んで飛んでいた。そのパイロットからの通信だった。

「今から、そちらをエスコートします」

その操縦士から誘導を受け、操縦桿を動かしていくアリア。その数分後に、旅客機は羽田の滑走路に舞い降りた。自分たちを助けてくれた飛行隊から最後の通信が入る。

『勇敢な武偵諸君へ賞賛を送る』

隊列を組んで戻ってきた五機の戦闘機。

東京の上空で、見事な編隊宙返りを見せてくれた。

帰郷

月が登り始めた頃、薄明りの星空を眺めながら溜め息をつく。
ここは男子寮の自室、そのベランダ。

「何でお前は武偵になったんや？」

遠くを眺めている、遠山の方に向く。

「家が、そういう家系だったのさ。正義の味方の家系だ」

「正義……ね」

再び夜空を見上げて呟く。

「そういうお前は、いったい何者なんだ？」

首だけ動かして、こちらを向く遠山。

「察してんねやろ？」

「まあだいたい、お前も正義の組織か何かか？」

「教える気はあらへん」

「そうか」

遠山もあまり深くまでは追及してこなかった。
自分の手のひらを見ながら考える。

『正義』それは、綺麗な言葉だろう。

その言葉で、戦うことができた人は大勢いる。

だが、その言葉を使って多くの人が殺人鬼になった。
言葉の力で戦争が起きた事は、いくらでもある。

二人の間に誰かが割って入ってきた。

「綺麗な夜空ね」

少し元気の無さそうな声で呟いたのはアリアだった。

「せやな」

続ける言葉を見つけないことができる。

遠山もなんと声をかけようか迷っている様子だ。

「ママの公判が延びたわ」

アリアが視線を一度下に落とす。

「今回の件で『武偵殺し』が冤罪って証明できたから……
弁護士の話では、最高裁が年単位で延期になるんだって」
「そうか」

良かったな、という雰囲気でもなく、遠山が短く返した。

「ねえキンジ、あんた何であの飛行機まで、助けに来てくれたの？
コウは何であの飛行機の中にいたの？」

「……ごめん、答えられん」

話すことは出来ない、謝罪の言葉を述べてその意を示す。

対して遠山は、どう言葉にするか悩んでいるみたいだ。

「……まあ、バカのお前じゃ、『武偵殺し』に勝てないと思ったからだよ」

「あ、あのくらい、あたし一人でなんとかできた。バカはそつちよ」

普通なら、自分の事を馬鹿にした遠山に何かしらの攻撃を仕掛けるのだが……

今日のアリアは妙に大人しかった。

「ごめん、今の嘘」

やや間を置いてから、アリアが口を日開く。

「どれが嘘だ」

遠山が深い溜め息をついた。

「私一人じゃ……どうにも出来なかった」

いつも自信满满、独断専行のアリアにしては珍しい台詞だった。

「あの空で分かったの、何でパートナーが必要なのかって。一人じゃ解決できないことがあるって、知ったの」

今この少女が言った事は、前のような一方的なものでなかった。真剣に背中を預けれる人を探している。

「だから、お別れを言いに来たの」

「お別れ？」

遠山が少し驚いたように言う。

「なんでや？」

驚いたのは自分も一緒だった。

「キンジは一回だけ事件に付き合ってもらった約束だった。コウも、私がパートナーを奴隷の様に思っていた頃に約束した。だから、もういいの」

返す言葉が浮かばない。

「もう二人を追わないわ。だから……でも、もしも、気が変わったなら」

やはり、諦めることはそう簡単にできないみたいだ。

「……悪い」

目を逸らしつつ、遠山が謝った。

「そう……今までありがとう」

それだけ呟いて、アリアは黙り込んだ。気まずい時間が流れていく。

ふと時計を見たアリアが呟く。

「もうこんな時間……」

「約束でもあるのか？」

「お迎えが来るのよ。ロンドン武偵局に戻るの」

アリアが昔活動していた場所、そこに戻るらしい。

「今までありがとう」

それだけ言って、アリアはベランダを去った。

空からの落とし物

アリアが去って行き、妙な静けさに包まれる。
遠山も部屋に戻っていった。

「戦う理由……か」

あの旅客機の中で少女に聞かれた。
お前の戦う理由は何だ？
と。

その少女は言った。
自分には守る者がいる。
だから、邪魔をするな。

—— 今、自分は悩んでいる。
何のために戦うか ——

考えても分からない。
自分は今まで任務を全うしてきた。

沢山の人を殺した。
けれど、同じくらい人も助けた。

そもそも自分達が武偵として行動するのも偽り。
偵察任務に近いものだ。

だからこそ、彼女を助ける義理は無いはず。
悩む必要も無いはず。

（このまま、ほっとけば良いやろ）

全部忘れてしまえばいい。

そう考えた。

——「私には時間が無いの！」——

不意にアリアの顔が浮かんだ。

自分の母が冤罪で捕えられている。

その冤罪を証明するために、必死で頑張っていた。

そこまで思い出した時、もう悩むことは無い。

窓を開けて部屋の中に戻ると、遠山は一通の書類を手にしていた。
そして、それを二枚に引き裂いた。

「何の紙やったん？」

「武偵高からの転出届」

「そないか」

「ああ」

その後、言葉は必要なかった。

扉をけ破って、全力で走る。

「へりが来るとしたら何処や!？」

「女子寮の上だ!」

目の前に現れる障害はすべて薙ぎ倒し飛び越えて、屋上を目指す。
最上階の扉を体当たりで無理やり開ける。

わずかに遅かった。

ヘリは離陸していた。

「「アリア！ 戻って来い！！ アリアアアア！！！」」

それでも構わず、二人で叫ぶ。

（やっぱ、手遅れか？）

そんな疑問が宿った時だった。

ヘリのドアが開き、一人の少女が落ちてくる。

「二人とも遅いのよ！！」

闇夜を背景にアリアが降下してくる。

「キンジ、キャッチしろ、俺が下敷きになる！！」

「頼むぞ」

キンジの後ろへ回り込む。

「ちゃんと受け止めなさいよ！」

全てをこちらに託して落ちる。

遠矢が受け止め後ろに倒れてくる。

その下にヘッドスライディングの要領で滑り込む。

そして、背中に重たい物が落ちてきた。

「みんな生きとるか？」

「当たり前よ！」「もちろんだ」

ふと上を見上げると、へりから数人の人間がおりてくるのが見えた。

「逃げるぞ！」

いち早く動いたのはキンジだった。

階段で降りていては間に合わない。

だとしたら、残る脱出経路はあと一つ。

屋上から飛び降りる事だけだ。

「ひいひいひい、やつほおおおおお！……！」

そんな雄叫びと共に温室のビニールハウスに突っ込んだ。

本当はお淑やか？

女子寮の屋上から飛び降りて、ロンドンからの役人を撒いて、自室。

「えらい無茶したもんな」

「屋上から飛び降りるなんて、どんな神経してるのよ」
「それしかなかった、仕方ないだろ」

それでも全員が笑っているのは、いい事なのだろう。

「とにかく——」

アリアが何かを言いかけた時、遠山の携帯が着信音を鳴らした。

「悪い」

画面を開けて、文字を読む遠山。
その顔が次第に青ざめていく。
手が尋常じゃないくらい震えている。

「ちょ、どないしてん？」

「に、ににに、逃げ——」

直後に何かが斬られた音がした。

「何が起きたの？」

それはすぐに姿を現した。

刀を抱えた巫女装束姿の少女。

確か一度見たことがある、白雪とか言う名前だったはず。
三人の姿を見渡して、一人の人間に目が止まる。

「やつぱりいた！ 神崎・H・アリア！」

そう叫ぶなりいきなり日本刀を持ち上げる。

「天誅うう！」

叫びつつ斬り下す。

アリアはそれを両の手で受け止めた。
俗に言う、真剣白刃取りだ。

「一体なんなのよ！」

距離を取ってガバメントを取り出すアリア。
仲裁を求めるために遠山を探したが彼は既に居なかった。

じりじりとタイミングを計る二人。
その数秒後には、激しい戦いが繰り広げられた。

体に新しい穴が開く前になんとか玄関を脱出した。
今日はあの部屋に帰れる気がしない。

「で、康介さんはここに来たのですか？」
「はい」

ここは女子寮の一室、ライカの部屋だ。

「うりゆ、私は構いませんよ。

ルチアさんが居なくなつて私も寂しかったですし」
「助かる」

キッチンに立っているライカ、何か作っているみたいだ。

「もうすぐ、お料理ができます。食べますか？」

「おう、何を作つてんの？」

「んと、ぼるしちです」

ボルシチ、ロシア語でいうスープみたいな物。

まだ、料理を食べていない康介はテーブルに座っている。

「できました」

火を消して、鍋を抱えて持つてくる。

その後、パンやチーズなどを取り出して並べていく。
高い所にある皿などは出すのを手伝う。

「おいしい」

出来立てのスープを口に含んだとき、自然にそんな言葉が出た。

「うりゆ、うれしいです」

結局その日は、ライカの部屋に泊まることになった。

ぬくもり

「ルチアの時とか？」

「うりゅ、もちろんです」

「出来れば退いてくれんか？」

「うりゅう、寂しいんです。だめですか？」

くるりと反転してこちらを上目遣いに覗くライカ。
その顔は目と鼻の先、すぐ傍にある。

「俺の性別分かってる？」

「うりゃ？ コウさんなら安心できます」

今、二人は同じ布団で寝ている。

夕食を食べ終わり、最近起きたことを話していると時間は過ぎ。

そろそろ寝ようと康介が提案したところ、ライカは一緒に寝たい
と言い出した。

ライカの時も同じようにして寝ていたらしい。

あの、大らかなルチアなら断ることは無いであろう。

だがしかし、康介は男。

いくらライカが子供っぽいとはいえ、一人の女性であることに変わりはない。

「あの、ホンマに……」

「ぐっすっぴっ」

そのまま寝入ってしまった。

「起きろ、とりあえず起きろ」

ゆすつても起きない、気持ちよさそうに寝ている。

カーテンの合間から漏れた月明かりが亜麻色の髪を照らした。

真つ直ぐ綺麗で、なめらかな髪の毛だ。

痛んでいる所もはねている所も無く、薄っすらと百合の花の匂いがした。

（やっぱ、女の子はちゃうな）

自分のぼさぼさな髪の毛。

シャンプーで適当に洗い流し、タオルで乱暴に拭く。

リンスなんてしたことも無い、櫛で梳かすこともしない。

それと比べるとライカの髪の毛はとても美しく見えた。

無意識のうちにライカの頭を撫でていた。

起きるかと思ったがそんなことは無く。

ライカは気持ちよさそうだった。

（なんか、犬みたいな奴やな）

鼻をくすぐる甘い香りと眠気に誘われ、次第に目蓋が下がっていく。
る。

その日は久しぶりに心地よく眠れた。

意外な一面

次の日、自室に帰った康介は床に突っ伏していた。

「何や！？ 何があつてん！？ 何があつたらこうなんねん！？」

一昨日までは普通の、テレビやテーブル、本棚、食器棚のある文明の形がはつきりあった。

だが今はどうだろう、部屋のあちこちに穴や切り裂かれた跡がある。

家具はことごとく破壊されていた。

「朝からうるさいわね」

玄関口から聞こえた大声に目を覚ましたアリアが寝室から出てきた。

後ろからキンジも眠そうな顔を出す。

「ここにあつたはずのテレビは？ テーブルは！？ 俺の本棚は！？」

部屋を見渡すキンジ。

「あれ、じゃないか？」

そこには無残に破壊された本棚の姿があつた。
今まで自分が集めてきた世界中の城に関する本が変わり果てた姿になっている。

「のおおおおおおおお！！！！！！」

康介が頭を抱えて絶叫する。

「うるさい！」

アリアの回し蹴りが顔面に炸裂する。

「お前だろ！ この部屋をここまで壊したのは？」

「あたしじゃない白雪よ！」

「昨日、暴れとったやろ！」

「だから、あたしじゃない！ 白雪がやったって言うてるでしょ！」

その後どれだけ言っても聞き入られることは無かった。

さしもの康介も口論に疲れたのか、アリアに何かを言うのをやめる

「結構苦労したのに……」

それだけ呟いて、康介はフラフラと本の残骸へ歩み寄る。

そのまま三角座りになって動かなくなった。

その様子ははつきり言っただけで暗い。

まるで何かに病んでいる様だ。

（ちょっと、コウはどうしたの？）

異様な光景に少し引き気味のアリアがキンジに小声で尋ねる

（多分自分の大切な物が無残な姿になったから、だと思うが）

二人そろって康介の方を向く。

（何かヤバそうね……）

（ああ、ヤバそうだな）

なんと声をかけるべきかと悩んでいると、康介は立ち上がった。目の焦点が合っておらず、足取りも怪しい。

「あの、コウ、私も悪かったと思うの、その……」

さすがに罪悪感を感じたのか、アリアが謝ろうとする。そんなアリアの言葉に耳を貸さず、玄関で靴を履き外へ出ていく康介。

ふと時計を見た遠山がその後ろ姿に向かって叫ぶ。

「コウ！ 学校は！？ ちょ、おい、どこに行くんだ！？」

そのまま康介は何処かへ消えた。

——学校の昼休み——

「うりゃ？ 遠山さん、康介さんを知りませんか？」

朝から姿を見せない康介を不思議に思ったライカが遠山に尋ねる。学校の用意があるからと、ライカの部屋を朝早くに出て行った。そして、また顔を合わせるはずの教室にいない。

「その……どこかへ行つた」

キンジ自身も康介が何処に行つたのか知らないので、曖昧な返事しか返せない。

「うりゅう、そうですか……」

あの後、一体どこへ行つたのでしょうか？」

その言葉にアリアが食いつく。

「え、あの後ってどういうこと？」

「うりゃ？ 私の部屋から帰って行つたときです」

その言葉を聞いたキンジとアリアがぎよつとする。

「ライカの部屋を出たって、朝の事か？」

「うりゅ、今日の朝早くに私の部屋を出て行かれました」

「昨日、コウは部屋に帰ってこなかったのだが……」

「うりゃ？ コウさんは私の部屋にいましたよ」

洗いざらい昨日の夜の事を話すライカ。

「もしかして、昨日コウはライカの部屋に泊つたのか？」

少し声のトーンを落としてキンジが尋ねる。

「うりゅ、一緒のお布団で寝ました」

康介にあらぬ疑惑がかけられた瞬間であつた。

その会話を、武藤、不知火、理子はしっかり聞いていた。

——時は少し前のこと——

自分の大切な書物を失い、康介は文字通り幽霊のように街を徘徊していく。

その足が自然に向かったのは、本屋。

「合計5万3,025円になります」

「カードで」

一枚のカードを取り出して店員に渡す康介。

レジに出されたカゴには大小様々な本が一杯に入っていた。

大きな紙袋三つに詰められていく、本を抱えてまた別のところへ歩いていく。

その後、夕暮れ時まで本屋、中古本屋を巡った康介は午後四時に帰宅した。

「コウ、何処にいたんだ？　ってなんだその大荷物は！？」

キンジが目にしたのは、左右の手に各五袋ずつ紙袋を持つ康介の姿だった。

軽く見積もっても百冊近くの本はありそうだ。

その背中には、組み立て式のアルミ製本棚キットが顔を出している。

「お前、まさか本を買ってたのか！？」

く。
康介は何も言わず、寮の各部屋に四つある小さな私室に入っ

「ちょっと、何があったの？ 開けなさいよ！」

扉を閉じてから一歩も部屋を出てこない康介を引きずりだそうと
アリアがドア越しに怒鳴る。

だが、買った本は一度読んでから本棚に入れる康介。
次の日の朝まで姿を見せることは無かった。

意外な一面（後書き）

完全にギャグ回です。

新装備

自室が半壊状態になってから数日。
康介は再びライカの部屋にいた。

だが今回はライカに呼ばれて来ている。
どうやら新しい銃が届いたようだ。

「うりゆ、どうですかコウさん？ 私専用の銃なんです」

黒いケースから取り出されたのは、二丁の拳銃。
CZ75SP1が二丁だった。

ライカの愛銃CZ75のフルサイズモデルでマウントレールを装備している。

銃剣を付けることが可能な拳銃である。

一つは通常の黒色だが、もう一つは藍色に彩られていた。

「何で二丁も？」

「もってみてください、そうすればわかりますよ」

藍色の銃が渡される。

グリップを握るが特に変わった感触は無い。

「？」

右手の親指を動かして気が付く。
マガジンリリースやセーフティが銃の左側ではなく右側について

いる。

排莢口も通常とは反対の左側に設けられていた。
簡単に言くと、左右の構造が普通の拳銃と反対なのだ。

「なんだこりゃ」

怪訝に思いながらも銃をライカに返す。

「うりゅ、どうですか？ 二丁拳銃です」

黒の銃を右手に、藍の銃を左手に構えるライカ。

マガジンポーチと一体型のホルスターを両太ももに装着するライカ。

両手を腹部の前方で交差させて銃を抜いたり収めたりと確認動作を行う。

マガジンポーチは太腿に対して斜めに取り付けられる形になっている。

おそらく片手で再装填できるように工夫された物だろう。

他にもう一丁SR2“ベレスク”短機関銃がケースの中に入っていた。

9×21ミリの弾薬を使う貫通性に優れたサブマシンガンだ。

「何で新しい銃なんて今頃に？」

「うりゅ、この前のハイジャック事件で破損してしまったんです」

「ああ、あの紅尻尾あかしっぽの奴にやられたときか」

「うりゃ、そうです」

たびたび姿を現す謎の敵、紅い髪の少女を便宜上『紅尻尾』と中隊で読んでいる。

その少女とライカは一度戦い、ライカの敗北で終わっている。

康介自身も二度戦ったが、倒すことができず傷を負うことがあった。

武装はそこまで重装備ではない、トカレフとナイフが主だった、

「ところで何でCZシリーズやねん？ お前は確かロシア系統の武器やろ？」

ふと今までのライカの装備を思い出して聞いている。

どれも、ロシアの武器を使っていたのに、拳銃だけチェコ製だ。

東側諸国の作った銃だから関係性が無いとはいえ、少し不自然だった。

そもそもチェコ製の銃はルチアの専門だ。

「うりゃ？ それはその、少し事情がありまして……」
「事情？」

ライカの説明だとかこういう事になる。

ハイジャック事件にて愛用の拳銃と短機関銃を損失。

新たな銃を申請した時にルチアと相談した。

内容はこうだ。

康介の持つ愛称、使用する銃器から付けられた『亡霊』^{スベクトラ}の名に憧れた。

『亡霊』みたいにカッコイイ名を持つ銃は無いかとルチアに尋ね

た。

するとルチアはCZ75シリーズの一つ『シャドウ影』の名を冠する銃を教えた。

それがCZ75SP1だった。

さらに前々からルチアが持つてはいたが使わなかった左利き用の型も送ってきたらしい。

それが、あの藍色のCZ75SP1らしい。

ルチア曰く「左手で拳銃は撃つ機会はない」

と、零中隊専属の銃技師兼銃鍛冶である木山軍曹の手作りのSP1を返却した。

使用者が居らず、倉庫に眠っていたのをライカが譲り受けたという事になる。

「てことはお前の愛称は『影』とか『夕闇』か？」

「うりゅ、『幽霊』だそうです」

「それやと俺と一緒にやないか」

「いえ、厳密に辞書で調べると少し違いますよ」

ライカが言うには。

幽霊は、実際には無い物が有るように見えること。

亡霊は、その復活を恐れられる、今は滅びた過去の物のこと。

という事らしい。

だが、辞書のどちらにも『死者の魂』と記載されていた。

ライカの言ったことは、その下の第二第三の意味である。

「ま、お前が好きなんやったらそれでええと思うけど」
「うりゅ、とても気に入っています」

そんな折であつた、中隊専用のノートパソコンに一通のメールが届いた。

暗号化された文書は、自分たち二人に対する指令書だつた。

夕風に漂う血の匂い

夕方七時を過ぎた頃。

康介とライカは有明四丁目、コンテナの立ち並ぶ港に向かっていった。

今回の任務は中国経由で来た密輸員の殲滅、密輸船の撃沈もしくは奪取。

密輸物資は阿片や大麻などの麻薬物質だそうだ。

「敵は特殊部隊では無いが油断するなよ？」

「はい」

コンテナを背にしながら物陰から物陰へと移動していく。

康介は手にはS p e c t e r短機関銃、ライカは両手にC Z 7 5 S P 1を握っている。

本当はS R 2を持ってきて欲しかったが、今回は比較的簡単なので何も言わなかった。

目標地点まで数十メートルと近づいてきた。

夕風のせいか辺りに風は無く、暗闇と静寂が体を包んでいる。

その時、鼻をかすめる濃い匂いがした。
人の血の匂い。

「ヴェスパ7、止まれ」

「？」

コンテナとコンテナの間に銃を握った人が倒れていた。体のあちこちに銃で撃たれたような跡がある。

もがき苦しんだのか、付近の地面やコンテナに大量の血が塗りつけられていた。

死因は出血死、どの傷も急所がない。

道の先に、血の足跡が続いている。

撃った人間を踏みつけてからこの場を去ったのだろうか。

「ヴェスパ3から本部へ、作戦地点にて銃撃戦の跡を発見。他に作戦中のヴェスパ、並びに別勢力の情報は？」

「こちら本部、現在有明で行動中のヴェスパは3と7のみ。自衛隊、警察も行動を確認していない」

「ヴェスパ3と7はこのまま戦闘行動に入ります」

「承認する。正体不明の敵も排除して構わない」

「了解」

銃を構えつつ慎重に移動していく。

「またや」

コンテナの角を曲がるとすぐそこにまた同じような姿態があった。やはり苦しんで暴れた跡がある、銃弾は全で一撃で死なない場所を貫いている。

次に見つけた死体は、四肢をもぎ取られていた。複数回にわたって殴打された後もある。

間違いない、猟奇的な人間の殺し方だ。
それも手練れだ、相手にほとんど抵抗されていない。

「コウさん……これ……」

「作戦中はコールサインを使い。あまり死体は見るな」

残酷な手口で殺された屍を見たライカは青ざめている。
康介自身も気分が悪そうだ。

（気味が悪いわ）

コンテナを抜けると一隻の小型船が港に接舷していた。
そこに数回マズルフラッシュが光る。

コンテナの陰から様子を窺う。
しばらくすると、船の中から長身の人影が現れた。

月明かりを背にしているので顔が分からないが、その両の眼だけは異様に浮き上がっている。
その眼は真っ直ぐ、こちらを捉えた。

狂った猛獣

あれは危ない目、人が苦しむのを楽しむ目だった。
こちらを見て、自分の姿を捉えてもなお笑っている。

「ヴェスパ7、後退して背後のカバーを頼む。一対一に持ち込む」
「了解です」

ライカは後方に下がって、正体不明の敵に迂回していく。

気味の悪い笑みを浮かべながら相手はこちらに近づいてくる。
ゆっくりと歩いてくるのは、余裕の表れだろう。
背は高く、黒い血の色をした髪の子だった。

コンテナに身を隠しつつ、短機関銃を向けて撃つ。
相手は素早く身をかめて三つ放れたコンテナの陰に隠れた。

「ヴェスパ7、回り込みは中止。その場で待機」

無線機にそう告げる。

だが、答えが返ってこない。

「よそ見してる場合かー？ ちゃんと前の敵も見なよ！！」

コンテナ上から不気味な声がした。
相手はこちらに銃を向けている。

バトルライフルに分類されるM14EBRだ。

「くそっ！」

「ヤッハー！！」

豪快に叫びながら撃ってきた。

全力でその場を離れ、コンテナの後ろに隠れる。

だが、強力な7・62ミリ弾を使うM14は簡単に薄い鉄板を貫通した。

凶暴な銃弾が暴力的に降り注いでくる。

アサルトライフルを持って来るべきだったと悔やむ。
だが、現状の武装で対応するしか無い。

相手のライフルの弱点は装弾数の低さ。
弾倉を取り換える瞬間に至近距離持ち込むしかない。

激しい銃撃が止まる、物陰に体を隠しながら覗くと相手は弾倉を取り換えている。

コンテナ上部に立つ相手に短機関銃を撃ちながら素早く近づく。

「はっ、甘いね！！ このバカが！！」

持っているEBRを投げつけてきた。
ギリギリのところで右に飛んで避ける。

「そつちに気を取られてんじゃないよ！！」
「なっ！！」

二メートルはある距離を、助走もつけずに飛んだ。
覆いかぶさるようになから飛び抑えられ、一瞬で馬乗りになれた。

「ひゃっはっは！ 強化された人間がお前達だけだと思ったか！
」

康介の首を絞めながら、女が狂ったように喋りだす。

「てめえ男か！？ おもしれえ、ヴェスパに男が居たとは！」
「何……だと」

首を絞める手を掴んで引き剥がそうとするが、相手の腕は微動だにしない。

「冥土の土産に教えてやるよ、あたしはベルヴァ。
あんたらと同じで、体のあちこちいじくってできた化け物さ！」

手の力が一層強くなる。
首の骨がきしむ音がする。

「苦しみな、それがあたしの楽しみさ！ あんただって、人を殺すのが好きなんだろ！」

歯をむき出しにして笑うベルヴァと名乗る女は、化け物そのものだった。

「お前と……一緒にするな！！」

上半身と下半身を使い、反動をつけて相手を押し飛ばす。

「何が違うのさ？ 人を殺して生きてきたんだろ？ 人を殺すために生きてきたんだろ？」

伊・Uは面白い所だよ、あたしに人殺しの楽しみをくれるから

ね！」

銃も持たず再び突進してくる。

素早く拳銃を抜いて、右胸と右の太腿を撃ち抜く。

「はは！ 聞かないね！！」

痛みをものともせず再びつかみ合う形になる。

「ライカもそうさね！ あの子も殺すための機械さ！！」

ソ連兵の生き残りは面白い事を考えるね！！ その技術があたしに使われたんだから！！！！」

相手の左手を右手で右手を左手に掴み、力比べをする姿勢で両者とも固まっている。

決して動いてないわけではない、全身の筋肉を振り絞って押し合っていた。

「ライカがソ連の残党に作られた！？」

「よく知らないけどな、あたしは伊・Uで作られたからねえ。」

でも、あたしを作った奴らはソ連の残党だったらしい、ゼツィーベはそう言ってた」

ベルヴアは組織をそこまで重くは見ていないようだ。

景気よく組織の情報を話していく。

「お前は何がしたいんだ！？」

「何言ってるんだい、人を殺さずして何のための存在だよ？」

あたしも、あんたも似たようなもんだろ！！」

相手が至近距離からの蹴りを放つ。

掴み合っていたため、腹の中を貫通するような衝撃が直撃した。

強烈な力で数メートル程、飛ばされる。

「げほっ」

内臓のどこかに傷が入ったのか、大量の血が口から吐き出された。足まで痛みが伝わって立つことができない。

「やっぱりいいね、殺し合いは!!」

再び飛び込んでくるベルヴァに数発の弾丸が飛来する。駆け付けたライカが撃った弾だった。

「ちっ、使えない奴らを雇うんじゃない」

それだけ呟いて、ベルヴァは海の中へ逃げて行った。ライカが傍に駆け寄ってくるのが目の端に移ったが、そこで意識が途切れた。

狂った猛獣（後書き）

『（BELVA）ベルヴァ』イタリア語で猛獣という意味です。
『ヴェスパ』は大雀蜂の学名『ヴェスパ・マンダリア』からです。

読んで頂きありがとうございます。

言い回しが下手な場所や、原作を活かしていない所が多くあると思います。

ほんの一言でもご指摘とご感想を頂けたら、嬉しいです。

記憶の隙間に現れて

——お前は誰だ？——

目の前には一人の人間が立っていた。
いや、人の形をした『影』とでも言った方がいいだろう。

——どうして生きてきた？——

口の無い顔、くぼみの無い表情。
頭の中に響く声、広い空間の中に自分は立っている。

「俺は豊和だ、人として生きてきた」

いつの間にかその影は後ろに立っていた。

——人の道を外れたお前が？ 人として？——
「それはっ！」

また目の前に現れる。

——お前は知っているはずだ、人の道を外れて人間という形で動いていることを——
「それが悪い事なのか!？」

掴みかかるが、また消えていなくなる。

——分かっているんだろう？ 自分が人殺しの化け物だってことが——

「そうだが、だが、しかし……」

——そうやって言い訳するのか？ 感じるよ自分の心の中の気持を——

「何の事だ？」

——生き物の中にある『戦う』衝動の事だ——

影が薄くなっていく。

「逃げるな!!」

必死で追いかける。

影は、どんどん遠ざかっていく。

そして、見えなくなった。

「一体……」

後ろからの冷たい視線。

「なっ!？」

振り向いて目に入っただのは人の顔。
自分が殺した人間の。

一つではない、いつの間にか自分の周囲には数えきれない顔が浮かんでいた。

全て自分が殺した人間の顔だ。
それが一斉に襲ってくる。

——亡霊なら亡霊らしく生きていろよ——

その言葉が頭に響いた。

目を開けると、いつかの時のように白い天井が見えた。

「うりゃ、コウさん目を覚ましたか？」

何故か主水先生ではなく、ライカがベッドのそばに居た。
頭の中がぼんやりとしていて、うまく物事が思い出せない。

「ここは？」

「特務零中隊本部の医療施設です」

ああ、そうだった。

確か作戦中ベルヴァという女と交戦し、気絶したのだ。

「作戦はどうなった？」

「うりゅ、目標の中国系密輸者は、謎の敵がほとんど制圧して
いました。」

私も複数の敵と戦いましたが撃退に成功しています。
作戦は成功しました」

制圧目標は中国人だったから、それを倒しているので作戦は一応
成功という事になる。

だが、どう考えてもあのベルヴァとは再び銃火を交えることにな
りそうだ。

「うりゅー、でも良かったです目が覚めて」

「そんなに危なかったのか？」

「三日間ずっと寝てたんです」

よく見ると、ライカは少し眠たそうな眼をしている。

「もしかして、ライカが看病してくれたのか？」

「うりゅ、もちろんです。」

私が駆けつけるのが遅れたせいで、コウさんが怪我をしてしまったのですから」

腹部に痛みは感じない、恐らくそこまで酷い損傷ではなかったのだろう。

眠っていたのは頭部へのダメージが原因かも知れない。

目が覚めた直後だというのに、ヴェスパ全員に招集がかった。

——作戦会議室にて——

「今から通称『伊・U』と『ソ連の残党』についての収集情報を説明する」

背後に大きなスクリーンを背負って中尉が立っている。

部屋の中にはヴェスパ2、3、4、5、7が座っていた。

「まずは『伊・U』についてだ。

細かい歴史を省くが本は枢軸国の共同開発機関だ。

我が中隊も幾度か戦っているが厄介な相手だった。

一般の人間だけで構成されていないのが問題だ」

一般ではない人間、超能力を使う人間がいると中尉は言った。康介も飛行機で理子と戦ったが、彼女もその一人だ。

「現在でも拠点の存在が判明しない」

誰もが予想していたのか、これといった反応は無い。

「だが、もう一つの組織『ソ連の残党』についてはいくつかの情報が集まった」

隊員に少し驚きが生まれる。

「形態的には『伊・U』のソ連版だと思ってくれたらいい。異なる点はいくつかある。」

彼らは『ヴェスパ』と似通った人口強化人間を作っている事。組織の構成員はロシア人と日本人の混成。

そして、拠点はおそらく関東か東北だと推測される」

驚きの言葉だった、広い範囲ではあるが相手の拠点が判明しているらしい。

「これはロシア、朝鮮経由の密輸物資にある薬剤等のルートから割り出した。」

そのほかにも武器の流れや―――」

その後入手した様々な情報を聞いてから会議は終わった。その夜、康介とライカは東京へと再び向かった。

たんこぶ

「で、朝方に帰ってきたのか？」

「ああ、そんなところだ」

朝食のテーブルを三人が囲んでいた。

アリアと遠山には、依頼で学校を休んでいたと話した。

「あんたねえ、クエストするならリーダーのあたしに言いなさいよ。」

次、何も言わずにクエストしてたら、殴るからね！」

「今回は蹴りが入りましたが」

変な方向に曲がった首を回しながら恨みがましく呟く。

ただ、これ以上文句を言っていると打撃だけでは済まなさそうだった。すでに銃に手を掛けてます。

「それはそうとキンジ、頭のたんこぶはどないしたん？」

遠山は朝から頭をずっと摩っている、どこかにぶつけたのだろうか？

「これはだな……」

「あたしとの特訓中にできたのよ」

原因はアリアだった。

「今、真剣白刃取りの練習してるの」
「へー、そうでっか」

面白い事をしているなと思いつつ、コップを傾けて水を飲む。

「コウもやる？ 手伝ってあげる」

「ああ、別に良いよ」

軽い感じで受け流す。

「手伝って、あ・げ・る！」

ん？ もしかしてこれって強制。

「出来れば遠慮したいんやけど……」

静かにコルトに手を伸ばすアリア。

「選ばせてあげる。するの？ それとも、やるの？」

答えは一択しかなかった。

そして、その日の午後には二人の男が倒れていた。

「だらしないわね」

「木刀って結構痛いぞ！ 何で全力で振り下すねん！！」

「私はいつでも全力なのよ」

「味方に全力を出してどうする！？」

「意外と気持ちいいのよ」

やばい、コイツは真正のドSだ！
何か快感を覚えつつあるぞ！！

「もう少しやってみる？」

今度は鞭^{むち}を取り出してきた。

「それ、もはや剣とちゃう！」

「仕方ないわね」

何とか思いとどまってくれたようだ。
隣に倒れている男、遠山はまだ起きてくる気配が無い。
仰向けになって大の字で倒れている。

「起・き・な・さ・い・よ！！」

いきなり馬乗りになって往復ビンタを繰り返すアリア。

「ちょい、何してんねん！？」

「いや、何処かで寝たら死ぬって登山の本に書いてあったから」

「何処かは雪山やし！ そんな起こし方したら遠山が死ぬぞ！！」

「コイツは困難では死なないわよ」

自信ありげに胸を張るアリア。

そんなに逸らしてもガツカリが強調されるだけなのに……

「あんた、今あたしに失礼なこと考えなかった？」

「いえ、別に……」

人の思考も読めるのだろうか。

そんなことを考えていると、遠山が低い声で何かを呟く。

「ほら、死なないじゃない」

何を言っているのか分からないため、耳を澄ます。

「その川を渡ればいいのか？ 簡単だな……」

あれえ？

「六万だつて？ 相場は六文だろ……」

ヤバい領域に彼は足を踏み入れていた。

「アカン！ その川を渡るな遠山！！ 戻って来――――い
！――！！」

必死で揺り起こす。

その十数分後、遠山は何とか息を吹き返した。

「不思議な夢を見ていた気がする」

起き上がった遠山はそんなことを言っていたが、深くは思い出さ
せないようにした。

そんなこんなで教務課の前を通過していく。

ふとアリアが、何かを見つけたのか立ち止まる。

康介と遠山を手招きで呼ぶ。

掲示板を見ると一枚の紙が貼り出されていた。

<生徒呼び出し 2年B組 星伽白雪>
ほとき しらゆき

その張り出しを見たアリアの目は、悪い目になっていた。
直感で分かる、次にいう事はロクでもない事だ。

「キンジ、コウ、今から教務科に潜入よ」
「オーマイガット!!」

案の定、突拍子も無く最悪の言葉だった。

依頼は無料 弾代は有料

細いダクトの中を3人が進んでいる。

アリア、康介、キンジの順番だ。

「アリアもコウも速いな」

遠山が少し遅れ気味だった。

「まあ、慣れとるしな」

まあ、いろんな作戦で内部に侵入して奇襲、っていうのもあったから。

「得意なの。^{アサルト}強襲科の中で一番早いだよ」
「だろうと思ったよ」

遠山がさも納得したように言う。

「なんで？」

振り向かずにアリアが訪ねる。

「邪魔になるものが無いから」
「何の事？」

身の危険を感じて後退しようとしたが、遠山の口が速かった。

「胸」

ドス！ ガスー！！ ガンガン！！！！

ミシミシミシ！！！！（頭蓋骨にひびが入る音）

「ストップ！ アリアストップ！！ 俺や、豊和やー！」

「あ、ごめん」

顔を掴んでいた手が離れる。

どうやら遠山が後ろにいて思っていたのだろう。

「キンジ、後で裏な？」

お喋りなコイツには後でお灸をすえる必要があるみたいだ。
ドスのある声で宣言しておく。

そうこうしていると目的の部屋に着いたみたいだ。
二人の人間が話し合っている。

一人は白雪、もう一人は教師の綴つづみ 梅子うめこ。
雰囲気からして真剣な話をしているみたいだ。

「星伽せいかいい、いい加減護衛を付けろって。

デュランダル
魔剣が狙ってるって諜報科やSSRだって予測してんだからー」

「はい、わかっているんですが……」

やや、力なさげに返答する白雪だった。

（デュランダル？）

聞いたことの無い言葉に疑問が浮かぶ。

アリアに尋ねようと前を見る。

何故かアリアの顔は真剣になっていた。

「もうすぐアドシールドだから、その間だけでも校内から護衛を選んだけようか？」

「でも……」

白雪の言葉はダクトからアリアによって遮られた。

「そのボディーガード、あたしがタダでやってあげる！！」

何言っただあの野郎。

依頼受けるときは相談とか抜かしてたのに、真っ先に無視しやがった。

「そこは入り口じゃない。あっちだ、出直して来い」
「そう」

綴がそう言うと、一度部屋を出て、また部屋に入りなおすアリア。きちんと、出入り口である扉から。

「はい、そのダクトに残ってる奴も出てくる」

あつさりと見抜かれて降りる羽目になる。

3人が並ぶと、綴は品定めするように一人一人を見た。

「悪くは無いな、こいつ等でいいじゃね」

問題なしといった感じで、白雪に振る綴。

しかも、まだ何も言っていないのに頭数に含まれていた。

「嫌です、キンちゃんは良いとして、アリアと一緒になのは嫌です！」

どうやら二人は犬猿の仲らしい。

「護衛させないといいつを撃つわよ！」

いきなりガバメントを遠山に向ける。

しかも、目は結構本気だ。^{ガチ}

護衛が護衛を殺してどうする？

心の中で突っ込むが誰も聞く者はいない。

「き……キンちゃん、卑怯よアリア」

しかも、人質として成立しちゃったよ！

どうなってんだよ、この状況！？

その後、しぶしぶ条件をのんだ白雪を3人で護衛することになった。

——自室にて——

「何でこうなるんや？」

部屋の中には着替えや化粧品その他諸々を持ってきた白雪が居た。護衛するためにここで泊るらしい。

「ま、ええわ。俺は出てくわ——」

襟首をアリアに掴まれる。

「却下。護衛が対象から目を話してどうするのよ？」

「二人も居たら良いだろ？」

その折、部屋に電子音の呼び鈴が鳴った。

「あたしが行く。あんたはここに居なさい」

アリアが扉を開ける。

だが、そこに人は居なかった。

「？」

いや、アリアの向こうに少しだけ頭が出ている。

亜麻色の髪が目に見えた。

「うりゃー、コウさん来ちゃいました」

どっかの誰かさんのように、右手に旅行鞆、背中には銃を背負っている。

銃も全部持ってきたようだ。

「あんた、確かライカだったっけ？」

アリアが確認するように言う。

「うりゅ、そうです」

「何しに来たの？」

「うりゃあ、泊まりに来ました」

瞬間、康介は固まった。

「やっぱり一人は寂しいです。だから、来ちゃいました」

「来ちゃいました、じゃねえわ。男子寮に何しにきとんじゃ！」

「うりゅ？ コウさんこの前私の部屋に泊まりましたよ？」

「それは――」

後ろを見ると遠山と白雪が、前を見るとアリアが白い目でこちらを見ていた。

その後、１時間ほど説明する羽目になった。

結果どうなったのかというと。

ライカが護衛に加わった、男はソファで寝ることになった。

さらに厄介な問題が出た。

ちよつとこつちに来いと言われて、アリアに連れられ寝室に入る。他の３人は居間に居る。

「あんた、銃はP210とSpecterよね？」

「ああ、せやで」

「じゃあ、三日以内に45口径の拳銃を用意しなさい」

「はあ？ なんで？」

「何となくよ、できればガバメント・シリーズがいいわ」

おつと、ついに装備の変更まで命令されてしまった。

「弾薬も共有できるし、それがいいと思うの」

「やったら、お前が変える。ColtZ40なら9パラで、ガバ

メントに似てるで？」

「あくまでも、45口径なの！　これ絶対！」

結局、康介が折れたのだった。

携帯端末で本部の銃器課にいる木山軍曹につなげる。

「ようヴェスパ3、どうした？」

「単刀直入でいうと、スイス関係の銃で45口径ってある？」

木山軍曹は特務零中隊専属の銃技師である。

銃が好きな彼は、色々な銃を取り扱えるという理由で所属している。

要望に合った銃を揃えてくれる、無くてはならない人物だ。

「あるぞ、シグアームズのGSRがそうだ。すぐに送る」

「ありがとう」

二日後にその銃は届いた。

そのケースの中に一通の手紙があった。

—— 零中隊で・45ACP弾は多く取り扱ってない。武偵として自費で調達するように——

「ぬおああああー!!」

その紙を真つ二つに引き裂いて絶叫した。

今回の依頼に本部からの弾薬支給は無く、報酬も無い。
あるのは支出だけだった。

捕えられない的

AM 6 : 38

昨日届いた新しい銃を試射するために、射撃場に来ていた。
これから使う銃に慣れる必要があるからだ。

そして、そこで一人の顔見知りと出会う。

無表情・無感情の代名詞と言われるレキだった。

以前の事件で一度だけ行動を共にした。
その時使っていた狙撃銃ドラグノフを背負っている。

「よう、おはよ」

無視するのもよくないと思い、軽く声をかけてみる。
さて、挨拶は返してくれるのだろうか？

「おはようございます、豊和さん」

意外と普通に返事が来た。

「何しに来たん？」

「狙撃の練習をしようと思っていました」

そう答えるとレキは射撃場内の射手位置に着く。
遅れて入った康介も少し離れたところで位置に着いた。

ドラグノフ特有の金属的な発砲音が鳴り響く。

こちらも、GSRを取り出して遊底を前後させる。

数メートル先の的の中心を狙って引金を引く。
いかにも45口径弾を撃ったという感触を感じる。

排莢口からリムレスの薬莢が飛び出していく。
それが、床に落ちて一定のリズムを刻んだ。

200発は撃つただろう。

あと、五倍ほど打ちたいが元々がSIGの銃でもあって命中精度も高い。

作動性も安心できそうだ。

ていうかよく見ると銃は一度手を加えられた跡がある。
おそらく木山軍曹が調整してしてくれたのだろう。

銃を仕舞って、置いてある箒で空薬莢を集めていく。
その折、レキも射撃を終えたみたいだ。

「終わったんか？」

「はい、終わりました」

レキも薬莢をかたずける為に箒を取り出そうとする。

「そっちの薬莢も集めるから退いてみー」

すでに箒を持っている自分が片付ける方が速そうなので、気軽に
言ってみた。

「……よろしく願います」

少し迷ったそぶりを見せた後、快諾してくれた。

レキはそんなに撃ってないのか、回収はすぐに終わる。

「ありがとうございます」

「別にお礼される程やないけど」

向き合って初めてレキが小さいという事に気が付いた。

アリアやライカより少し背が高いが、それでも小柄な方だ。

礼を言ったレキはそのままどこかへ歩いて行った。

特に話しかける用もなかったので、康介は話しかけなかった。

初めて会ったときは無口な人間かと思ったがそうではないらしい。
自分からは話さない物静かな人で、きちんとした言葉遣いのお淑やかな少女だった。

（物静かやし、アリアとは全然ちやうな！。

アイツも見習ってくれたらええんやけどな）

本人が聞いたら風穴では済まない事を考えてしまった。

そんなことを思いつつ、手に持っている穴だらけの紙を見る。

（全然アカンな……）

一発も中心にあたっていない。

それどころか黒丸の枠外に穴をあけてしまっている。

まるで、素人の射撃だった。

自分でもおかしいと思う。

原因は分かっている、迷っているんだ。

あの紅い髪の少女に負けて、ベルヴァという女にも負けた。

その時、敵に言われた言葉が今でも頭の中で浮かんでは消えている。

『あなたは何故戦う？ 理由も無いのに私を邪魔しないで！』

『何が違うのさ？ 人を殺して生きてきたんだろ？ 人を殺すために生きてきたんだろ？』

自分は何のために生きているのだろうか？

生きている理由は何だ？

ご飯を食べるため？ 本を読むため？ 息をするため？

それとも――

やはり、人を殺すためなのか？

自分は生きていて正しいのか？

いくら考えても答えが出ない。

考えれば考えるほど頭が痛くなるだけだった。

その後は、何事も無く、襲って来る者もおらず。
平凡に一日は過ぎる。

そんなことは無かった。

アリア、白雪という二人が一緒の場所に居たら無事に一日が過ぎない。

今も二人は睨み合っている。

原因はこうだ。

夕食時、アリアの前にだけ料理が出されなかった。
しぶしぶ白雪が出したのはご飯一杯。

依頼解消を盾にされたのでアリアは珍しく耐えた。

ここまでで、アリアは多分はらわたが煮えくり返っていただろう。

その後白雪が脱衣所にいる遠山に突撃し、何故か脱ぎだした。
そして、それをアリアが目撃した。

ここでついにアリアの堪忍袋の緒は激しく切れたのだろう。
二つの銃がスカートの中から現れる。

やっと、復旧したばかりの部屋が再び壊れていく。

「やめろアリア!!」

荒れ狂う銃弾の中から遠山の悲痛な叫び声が聞こえる。

何とアリアは白雪ではなく裸同然の遠山に銃を向けていたのだ。

本気で身の危険を感じたのだろう。

遠山は防弾性の物置に隠れずに、東京の海へとダイブした。

まだ肌寒い季節の中、四月の海に。

祖国を護った東と西の銃

ピピピピ。

小さな電子音が鳴る。

「38度1分、完全に風邪ひいたな」

ベッドの上で横になって寝ている遠山が体温計を枕元に置く。

「まあ寝とき。先生に伝えとくから、安心しとけ」

「ああ、頼む」

シャワーを浴びた直後に海へ飛び込んだ遠山は、風邪をひいた。医者を勧めたが、薬は効かない体質らしく寝て治すらしい。

「お大事にな」

それだけ言って登校の準備を始める。

その後寮を出たのは時間ギリギリだった。

白雪が遠山の看病をすと言って放れなかったからだ。

本来なら任しても問題は無い。

だが、今白雪は警護対象だ。

動けない遠山と二人きりにするのは良くないと考えたので止む無く連れて行った。

それ以前に遠山と白雪が二人だけだと、アリアが暴走を起こしそうなので。

という理由もあった。

そしてその日の午後。

白雪の護衛はレキとライカに任せてアリア、康介は買い物をしていた。

「そっぴやアリア、何で昼間おらんくなったん？」

この日の午後、時間でいうと13時頃にアリアは学校を出て行ったのだ。

そして、15時半頃に戻ってきた。

「べ、別に何でもないわ！」

何故が必要以上に動揺してアリアは先に行ってしまう。とくには気にせず、あるスーパーに入った。

何でも今日はアリアが夕食を作ってくれるらしい。おそらく、昨日の白雪に対抗するのだろう。

必要な物を買って、帰りの道に着く。

その途中、人気のない区画を通ることになった。

新しくできた建物が立ち並び、各種販売店が開店準備をしている区だった。

「ここに新しいゲーセンができるんか」

「ここも新しくなるのね」

改装中と書かれた看板を掲げている店を見ながら、適当な会話を
する。

面白そうな店を見つけたとき、後ろに何かが落ちた音がした。

「ん？」

振り返ると、それは物なんかじゃなかった。

紅い髪が軌跡を描きながら下りてくる。

「紅尻尾！？」

驚くよりも早く、左脇から銃を抜き出す。

だがそれよりも早く、相手の回し蹴りが康介を横に吹き飛ばした。

電柱に体を叩きつけられ、意識が朦朧とする。

立ち上がった時には、目の前に敵は迫っていた。

「がはっ！！」

強烈な掌底を無防備になった腹部に叩き込まれ、目の前が真っ暗になった。

そのまま、康介は地面に崩れ落ちた。

「あんた何者よ！？」

二丁のガバメントを、撃ちながらアリアが叫ぶ。
後ろに飛んで紅い髪の少女は回避する。

そのまま、二丁のトカレフを腰から抜き出した。
素早く動き回りながら、アリアめがけて銃を撃つ。

アリアも地面を蹴って横に素早く動いて回避する。

その動きを追うように、トカレフの銃口が動いていく。

だがアリアの銃、ガバメントも同じく正体不明の敵を追いかけている。

45口径の弾頭が周囲の建物に穴をあけていく。

どちらも19世紀に設計され、長年に渡って軍の主力を務めた名銃。

チンピラが使う銃と言う輩もいるが、それは全般的な外れな評価だ。

一撃で相手を行動する絶大なストップピングパワーを持つガバメント。

軟鉄を弾頭の強力小口径弾を撃つ、貫通力と信頼のトカレフ。

東と西の名銃が、今この場で激戦を繰り広げていた。

物陰から物陰へと移動し、両手に持つ銃を撃ちあう二人の少女。

離れたかと思うと、一気に格闘戦に持ち込む。

次の瞬間には二人の立ち位置が変わっている。

地面には複数の薬莢が散らばり、空になった弾倉が捨てられている。

周囲の物を破壊しつつ、その銃撃は続いていた。

「まずいわね……あのバカは寝てるし」

弾倉を取り替えるために物陰に隠れたアリアが呟く。

トカレフの装弾数は自分の持つ銃より一発多い八発。

武偵は人を殺せない、だが相手は確実にこちらを殺そうとしてい

る。

物陰から相手の様子を窺う、相手も身を潜めているみたいだ。

「あつ！？」

一気に距離を詰めて近接戦で仕留めようと切り込んだ。
だが、相手が姿を隠していると思った場所に人は居なかった。

アリアが敵の注意を引いているおかげで、康介に意識を取り戻す時間が生まれた。

だが、そこにアリアとの戦闘から戻った敵が再び迫っている。

一発の銃弾が康介のもたれている電柱に穴を開けた。
手にしたP210で反撃するが、弾丸は相手を捉えなかった。

二階から飛び降りてきた、敵は目の前に着地する。
この距離だと撃つより殴る方が速い。

銃を持っていない左手で相手を殴りつける。
相手も予想していたのか、右手で綺麗に捌さばかれた。

「あなたは邪魔なんです！」

「勝手に襲ってきてるのは、お前だろ！！」

「何故あなたはクドリヤフカから離れない！ あなたも、あの人を戦わせるんですか！？」

「じゃあ、お前は何でアイツを襲う！？ 襲えばアイツは戦うことになるだろ！！」

「そうしないと、姉さんを倒さないといけないんです！！」

「何故だ！？ お前は何を守る為に戦っている！？」

お互い強烈な蹴りと拳を繰り出して、傷だらけになりながら叫ぶ。鮮血が地面に飛び散っていた。

「あなたこそ何で戦っているんですか！？」

あなたは私の姉さんを殺した！ また、姉さんを奪うつもりですか！？」

「言っている意味が分からん！ 何が言いたいんだ！！ お前は一体誰なんだ？」

力の籠った彼女の右ストレートが顎を撃ち抜いた。足まで衝撃が走る。

相手が距離を取って、こちらに拳銃を向けた。二度も脳まで来る打撃を受けた康介は動くことができなかった。

その時、アリアの撃った銃弾が割って入った。形勢は不利と見たのか、相手は身を翻した

「私はゼッイーベ！ そう姉さんに伝えときなさい！！」

そう康介に叫んで、スモークグレネードのピンを抜いた。

大量の煙があたりを包み、ゼッイーベと名乗った少女が走り去った音がする。

追いかけることは不可能だった。

手ひどくやられたが、致命的な傷は無い。

数分も休むと、歩けるほどには回復する。

アリアは何も聞かず、何事も無かったかのように家へと歩いていった。

食卓は料理の墓場ともいう

『ゼッイーベ』と名乗る謎の少女と戦った後、アリアは何も聞いてこなかった。

何事も無かったかのように、乱れた髪を直し、買い物袋を拾って歩いている。

「なんで、なんも聞かへんのや？」

気まずい雰囲気になえて、自分から口を開いてしまった。
その姿は秘密組織で動く姿ではなく、年相応の様々なことに頭を悩ます少年そのものだ。

「アンタは前、海で私のパートナーになった時、何も聞かなかった。」

私もそうしているだけよ」

すぐに言葉を返せなかった。

いつも人のことなど、アリアは考えていないと思っていた。

でも、それは違った。

多分それは少しワガママなだけだったんだ。

きちんと人の心を読み取れる、母のために頑張る少女だった。
今はその横顔が輝いて見えた。

「そうしてもらえると、助かる。ありがとうな」

「べ、別に例と言われる事はしてないわよ！ さあ、さっさと帰りましょ！」

あの白雪とバカキンジが一緒だと何が起きるか分からないし」

そして、自室に戻るのだった。

「うりゃ？　アリアさんにコウさん泥だらけですよ、何かあったんですか？」

返ってきたアリアと康介の姿を見た、ライカが驚いている。

無理もない、アリアは泥だらけ、康介に至っては血だらけなのだ。

「盛大に転んだ」

事前に打ち合わせていた嘘だった。

けれども、人を疑う事を無いライカは真に受けて信じた。

遠山と白雪も黙って頷いてくれた。

「じゃあ料理を作るから」

そう言って、アリアはキッチンに入ってしまった。

開通しているリビングとダイニングにジャガイモと野菜の煮られるいい匂いが漂う。

時間は六時、あと三十分は掛かるだろうと思って自室で傷の手当てをする。

ついでにライカも呼ぶ。

「お前、兄弟とかっておるんか？」

「うりゅ？　うゝ……私は記憶が無いので」

そつえばそんなことを言っていた気がする。

「いや悪い、変なこと聞いたな」

「あ、いえ、気にしないで下さい」

記憶が無い人に聞いても仕方がないので、適当な話題に切り替えて時間を潰した。

三十分ほどしたところに、リビングに戻る。

そろそろ料理も出来ている頃だろう。

キッチンを覗くと、アリアはまだ鍋を似ていた。

「お、まだ、かかるんか？」

「そうね、あと三十分は掛かるわ」

時計を見たアリアが答える。

料理が完成するのは、七時になるという事だった。

そして、七時。

時間ぴったりに、コンロの火を消すアリア。

あの、時間の長さからしてスープかシチューだろう。

にしては、味付けのための香辛料等が数多くテーブルに並んでいるが。

せつせと鍋から、具を取り出していくアリア。

そして、鍋に残った汁は全て水道管に捨てられた。

（あれ？ スープじゃない？）

テーブルの中央に置かれた料理は、長時間茹でられてクタクタの

食材たちだった。

自分達で取っていく方式なのだろうか。

「……」

アリア以外の人間は言葉を失っていた。

そういえば聞いたことがある、イギリス人の調理法は『煮る』『茹でる』だけだと。

それも『とにかく！』これでもかと言う位に煮て茹でると聞いたことがある。

アリアはイギリスで暮らしていたと聞いた。

恐る恐る一つつまんで口に含む。

味が無い、香辛料の味しかない。

元の食材に味も食感も無い。

茹ですぎて、味が抜けきり物凄く柔らかくなっていた。

さしずめ離乳食が病院で食うおかゆみたいになっている。

とてもじゃないが、あまり食べたくない。

「どうしたの？　どんどん食べていいのよ？」

一人だけ、調理した本人だけは問題無さそうに食べている。

おまけに上機嫌なのかまんねんの笑顔だった。

白雪も文句を言いたそうだが、アリアの異様な笑顔に押されて口を開けないでいた。

遠山も口が引きつっている。

（残したら、風穴……開けられるかもしれへんな）

考える、この場を切り抜ける一番お方法を生み出すんだ。そう、考えるんだ康介。と自分に言い聞かせる。

まず、ライカを見る。笑顔だがパンしか食べていない。ダメ、使えない。

次、白雪。ある程度さらに取っているが箸が進んでいない。ダメ、警護対象に苦痛を与えてどうする。

最後に遠山。こいつも口をひきつらせて固まっている。コイツを何とか使えないだろうか？

頭を必死で動かすとある名案が閃いた。

遠山の席はアリアの向かい側。今、アリアは短いスカートを着ている。

この二つの条件が、康介にある解決策をもたらした。

「あ、スプーンを落としてもた。キンジ拾って？」

自然体を装ってわざとスプーンを落とす。疑いもせず、テーブルの下にもぐる遠山。

そのアゴをテーブルの下で持ち上げる。

そう、今彼は見ているはずだ、アリアの禁断の領域を。

すなわち、下着を――

何の意味があるかって？ それはもちろん彼の特技を呼び起こすためだ。

手を放すと、スプーンを拾い上げた遠山が上半身を起こす。よく見ると目つきが少し変わっている。

「キンジ、残さず食べるのよ」

そこに、ナイスなタイミングでアリアが声をかけた。

「ああ、可愛いアリアが作ってくれた料理はとても美味しいよ」

そう答えて、皿の上に乗る料理を全て片付けてくれた。

何とか、この場は切り抜けられたようだ。

この後、ものすごく怒られそうだが……

ケンカして

強襲科の施設の中で、アドシアードの練習を座りながら眺めている。

音楽等をやったことの無い康介は隅っこの方でパイプ椅子に座っていた。

暇ではあるが警護対象の白雪が監督を務めるチアを見ているのも悪くは無い。

容姿端麗、成績優秀、周りからの信頼も厚い。

遠山と話している時は少し人が変わるが、至ってまともな人だ。偏差値も70越えという驚異的な頭脳を持っているらしい。

ちなみに、遠山はギターを握っている。

やりたくなかったらしいがアリアに強制的に入隊させられていた。

「はい、じゃあ今日はここまでにしますねー。お疲れ様でしたー」

白雪がそう言うと、その場にいた女子は散らばっていった。ふと見ると、遠山は階段を上がっていた。

それを見たアリアがその後ろを追いかけていく。
白雪の護衛を康介に任せて。

「デュランダル
魔剣つて本当にいるのでしょうか？」

寮への帰り道、不意に白雪が言葉を発した。

「まあ、噂でしかないとは言ってるけど……」

誘拐事件は実際に起きてるんやから、油断はせん方が良いんとかやうかな？」

「でも……私なんかが狙われるんでしょうか？」

「まあ、先生も心配しとったんやし。可能性はあるんとちゃう？」
「そう思いますか？」

「用心にするにこしたことは無い、それくらいやな。俺が言えるんわ」

「そうします」

部屋に帰ってのんびりしていると、遠山が帰ってきた。

「お帰りー、ってアリアは？」

「知らねえよ」

ぶつきらばうな答えだった。

昨日の事を怒っているのだろうか？

遠山が部屋に入って来るのと同時に携帯の着信音が鳴った。

メールの送り主はアリアだった。

『今すぐ女子寮の屋上に来なさい』

短い文面にはそれだけが書かれていた。

画面を半分に畳んでポケットに入れ、靴を履いて女子寮の屋上を目指した。

「よー、何のよう?」

屋上に着くと、そこにはアリアとレキいた。

「あたし今日からレキの部屋で寝るから、あんたも来なさい」

いきなりそう言われた。

「は? 白雪の護衛は?」

「レキの部屋からなら、あの部屋を見張ることは出来るし、バカキンジもいるから大丈夫」

「別に俺が部屋に居ても……」

「いいから、リーダーのあたしの言うこと聞きなさい!」

拒否権なし、いつもの事でだんだん慣れてきた。

「つまりは、部屋に戻ったアカンてことか?」

「そうよ」

何か理由があるのかという聞いたら、意外と単純な事だった。どうやら遠山とケンカしたらしい。

まあ、険悪なムードの人間がお互い近付くよりは、いったん離れるのも策だろう。

だが、もう一つ問題がある。

「レキの部屋に行くのか?」

「そうよ」

「レキは良いのか？」
「構いません」

相も変わらずの無表情で何を考えているのか分からない。
面倒なのか歓迎しているのか。
まあ歓迎はしていないだろうが、少しは表情を動かしてもらえ
とありがたい。

「あー、俺は当てがあるから良いわ」
「ライカのところ？」

「まあ、そうなるかな」
「……」

あれ？ アリアの目が何か汚らわしい物を見る目になる。

「あの？ 何で俺は睨まれてんの？」
「あんた不潔よ！ その年で一緒に寝るなんて！」

「何で知ってんねん！？」
「あの子が言ってたもん！ コウと一緒に寝たって！！」

「あほか、紛らわしい言い方すんな！ アイツが俺の布団に潜り
込んだだけだ！！」
「うるさい！ うるさい！！ 一緒よ一緒！！ とにかく来るの
？」

結局アリアのゴリ押し勝ちで、レキの部屋にお邪魔することにな
る。

何故か、自分の替えの服が数着持ってこられていた。

「何故俺の服が……」

「私がとってきたのよ」

文句を言う気も失せたので、適当なソファに座った。
レキの部屋はとても質素だった。

持ち込んだものと思われるのは、銃を整備するための道具だけみたいだ。

ハンドローディング用の工具、空の薬莢と発射薬・弾丸。
ケース パウダー プリット

弾丸も自分で作っているらしい。

でも、それ以外の家具は全くとっていいほどない。

空いている部屋に適当に寝かせてもらう。

なんと言えない一日であった。

微笑み

AM 06:29

康介は今男子寮の屋上にいた。

右手には通信機を持ち、それを耳に当てている。

「——というのが、今までの経過です」

『なるほど紅尻尾の名前は予想通り<ゼッイーベ>だったのか』

「予想通り？」

『ハイジャックの際、お前とヴェスパ7が保護した少女の名前が<ボリク>だっただろう？』

確かそんな名前だった気がする。

『<ライカ>も<ボリク>もソ連の宇宙犬の名前と教えただろ。

<ゼッイーベ>は打ち上げ直前に脱走した<ボリク>の代理になった犬に付けられた名だ。

おおよそ見当はついていた』

「なるほど」

『そしてもう一人<ベルヴァ>という敵だが……

身体能力や性能は、ソ連の残党が作った強化人間だろう。

だが、こいつはおそらく、伊・Uに関係が深いだろう』

「何故ですか？」

『ベルヴァはイタリア語で猛獣。』

そして伊・Uは日独伊が共通言語だという情報がある。

今までロシア語の名前が付けられていたのに、一人だけイタリア語というのは変だろう？

それに、伊・Uは現在世界中から人間が集まっている。

目的は強くなることだ、そのために強化された人間が居ても不思議ではない』

天田中尉の推測は的を得ていた、納得もできる。

『だが紅尻尾の……ゼツイーベという少女の言っていることが分からん。

守るものがあるにしても、ライカを、ヴェスパ7を襲う理由は無はずだ』

「自分もそう思います」

その点だけは全く分からないのだ。

相手が理由を話してくれそうにないが。

『ところで、学園生活はどうだ？』

「？」

いきなり脈絡のない話題が上がる。

「あまり、強く感じるものではありませんが」

『そうか……』

注意の声はどこか少し落ち込んでいた。

『まいい、他に聞くことはあるか？』

「あー、できたら・45ACP弾の支給を願いたいのですが」

『却下だ。交信終了』

一方的に通信は切られた。
頭を抱えつつも武偵高へ向かうのであった。

――放課後――

「うりゅ、コウさん5月5日は暇ですか？」

1枚のチラシを持ってライカがそんなことを聞いてきた。
書いてあったのは

――東京ウオルトランド・花火大会――

「行きたいのか？」

「うりゅ、はいです！」

うーん、と少し考える。

暇言えば暇だが、出歩く気が無かった。

「アリアかレキとでも行ったらどうや？」

アリアはともかくレキと一緒にいくとは思えないが。
とりあえず言ってみた。

「アリアさんには断られてしまいました。レキさんは……少し話
しかけ辛いです……」

「そっか」

「だから、一緒に行っていただけませんか？」

じつと真っ直ぐにこちらを見つめてくる。

そんなにまじまじと見られたら断れない、計算の上でやっているのだろうか？

「わかった、一緒に行くわ」

「そうですか！　ありがとうございます！」

何がそこまで嬉しいのかわからないが、とても喜んでいる。そして、その日の夜。

『それはいわゆるデートってやつじゃない？』

康介は再び男子寮の屋上に来ていた。

電話の相手はヴェスパ1、知恵姐さんだ。

たぶん、寮の自室に戻ったライカがルチアに言ったのだろう。それに聞き耳を立てた千恵がさっそく電話をかけてきたのだ。

「そんなもんなのか？」

『祭りに男女二人っていうのはデートに決まってるわよ』

「てか姐さん、任務中やないん？」

『昨日終わったわ、美佳……いやヴェスパ6も帰ってるわ』

ヴェスパ6の美佳。

自分とは少し距離のある人物だ。

『雰囲気良かったらそのまま押し倒しても問題ないわよ』

「あほか！　問題大有りじゃー！！」

『いやー、でもあれでしょー。』

ライカはあんたに助けられてんじゃん、好意を持っててもおかしくないわよ』

「そんなことあるかいな」

そんなことをあいつが考えているとは思えない。

それよりも、知恵姐さんと直接話せるのはいいい機会だった。

『とまあ、話が逸れたわね』

「主に逸らしているのは姉さんやけど……」

『あははは、さて本題に戻りましょうか。』

能力者に分類される人間との戦い方ねえ……』

「ああ、姉さんは戦ったことがあると聞いた」

電話の向こうで、唸り声が聞こえた。

教え方が難しいのか、それとも教えられないのか。

『率直に言っと、あなたには無理よ』

「はあ!？」

以前ハイジャックで理子との戦闘時のことだ。

いきなり髪を動かされて、隙を作ってしまった。

これからの戦いに、能力者との戦いはありそうだったので、助言をもらいたかったのだ。

だが、頭ごなしに否定された。

『詳しいことは言えないんだけどねー。知りたいなら中尉に聞くしかないんだけど……』

「答えてくれないのか？」

『多分ね。でも能力者と戦う事なんて滅多に無いわ。必要なら、私か他のヴェスパが応援に行く』

「だが……」

『これ以上、この件については語れないわ』

厳しい口調で千恵が告げた。

「わかった、交信終了」

通信を切って、ポケットにしまう。
結局有力な情報は得られなかった。

実際に能力者と戦う事なんて滅多に無い事。
自分も一回しか戦ったことが無い。

康介自身でも杞憂だと思っている。
能力者との戦いを考えるなんて。
深い事は考えず、寢床に帰る。

—— 5月5日 ——

待ち合わせの場所、モノレールの駅でライカが来るのを待っている。

時間まで後十五分はあった。

少し向こうにライカらしき人物を見つける。
こっちに向かっているが、なんだか歩き辛そうだ。

「よー、っておい、その服どないしてん!？」

なんとライカは浴衣を着ていたのだ。

藍色の生地に小さな桜の模様、黄色い帯をしていた。

「うりゅ、通販というもので買ってみたんです。似合ってますか？」

カランコロン、と下駄を鳴らしながら歩み寄ってくる。

「自分で着付けたんか？」

「いえ、白雪さんにやってもらいました」

ああ、あの人ならできそうだ。
でもライカは何でこの格好を？

「ルチアさん曰く、日本の祭りは浴衣を着るものだと言っていました」

あいつはまた余計な事を、少し思ったが……

浴衣を着たライカを見ていると、むしろ良い仕事をしたと思ってきた。

とても可愛いのだ、布の間から見える白い肌がとても映えるている。

ほんのりと甘いユリの匂いも鼻をくすぐっていた。

「似合ってる」

勝手に言葉が出ていた。

「うりゅー、嬉しいです」

朗らかに笑うライカ、その笑顔はより一層、可愛く見えた。

「ま、とりあえず祭りに行くか？」

「はい、そうしましょう！」

いつもよりテンションの高い、ライカを連れて歩き出す康介。モノレールには、同じく祭りに向かう人間で大勢いた。

花火と射的と立ち並ぶ出店？

祭りの会場に来てからライカのテンションはとても高かった。
あっちへ行ったりこっちへ行ったりと目を離すことができない。

（これデートとちゃう、子守やろ）

知恵の言葉で少し浮かれていた康介だが、一気に現実に戻ってきた。

今も彼女はリング飴の屋台の前で物欲しそうにしている。

「おっちゃんリング飴一つ」

財布を開いて三百円を屋台の元氣そうな親父に渡す。

「はいよ兄ちゃん！ 高校生と小学生のカップルかい？ 今の若者は変わってるなあ」

「それはどうも」

こいつは俺と高2です。

と言つてやりたいところだが、面倒なので適当に受け流した。

「うりゆ、康介さん次はこれをやってみたいです！」

ちなみに支払いが俺なものには理由がある。

奴は財布を忘れて来ていたのだ。

発覚したのはモノレールに乗る時だ。

取りに帰るのは面倒で、全部おれが支払うことにした。

補足の情報としては、三日前に二万ほどの臨時収入があった。
送り主は、康介とライカが祭りに行くことを知った、天田中尉である。

——彼女と楽しんで来い——

同封されてた文章は瞬時に破ったが、中身はありがたく頂戴した。
それが今、有効活用されている。

（中尉ありがとう）

心の中でそつと感謝しておく。

「で、やりたいのはなんや？」

とライカの後に続くと思いの前にある出店が姿を現した。
こついった作品でおなじみの『射的』である。

（マジか……予想しとったけど、マジできやがった）

出店のお兄さんと目が合う。

康介は今、武偵高の学生服を着ている。

向こうは一目でこちらが武偵だという事が分かったはずだ。
にやりと屋台のお兄さんが笑うのが見える。

「そこのお兄さん、武偵の人だね？」

「ああ、せやけど」

そう答えると、近くに止まっていた貨物トラックのコンテナが開いた。

三段に分かれた棚と赤と青のマークのターゲット。

「兄ちゃん、これに挑戦しないか？」

明らかな挑戦状だった。

周りで何人か人間が呟くのが聞こえる。

「でた、武偵ばかりに挑戦状を送る、射的屋『八上』^{やかみ}」

「拳銃の装弾数を超えた的が出てくるんだから、勝てるわけないんだよな」

どうやら、この出店は毎回武偵に挑んでいるらしい。

『やれるもんなら、やってみろ』

そういう顔をしている。

「ライカ、俺が先にやる」

「うりゃ、ダメですよ私がやりたいんですよ」

財布から取り出した千円札をもぎ取って、屋台の兄貴に渡すライカ。

すでに勝ち誇った顔をしながら、説明を始める。

「俺がスタートと言ったらのが出てくる。

中心に当てる必要はない、何処かに当たっていればそれでいいよ。全部当てられたら景品に『M1ガーランド』を進呈します。

失敗したら、これに名前を書いてもらいます」

そう言って一枚の色紙を見せる屋台のお兄さん。
どうやら、勝負に負けた武偵はこれに名前を書いていくらしい。

よく見れば、屋台には何枚も名前の書かれた色紙が掛けられている。

こんな物が有ったら、それこそ武偵の威信に関わるだろう。

景品が『M1ガーランド』なのも頷ける。

マニアには高値で売れるし、自分が持っているにしても良い銃だ。
武偵なら欲しくなるのも当然だろう。

「うりゅ、わかりましたです」

ライカが巾着から、二丁の銃を取り出す。
黒と藍色のCZ75SP1が姿を現した。

続いて特製のマガジンホルダーが出てくる。
ベルトを回すように体に装着すると、左右四つずつ、計八個の弾
倉が取り付けられていた。

「準備はいいかいお嬢ちゃん？」

「はいっ！」

「よい、スタート!!」

掛け声と同時に三段目の右端の的が立ち上がる。
難なくそれは破壊される。

同時に一番下の段、左から二番目と三番目が立ち上がった。
難なく対応していくライカ。

15個目の的を壊した時、右手の弾切れを起こした。

「的は止まりませんよ！」

店の兄ちゃんが勝ち誇ったように言ったその時、二段目と三段目の的が二つ立ち上がった。

なるほど、弾切れを起こしている最中は的を撃てない。

この仕組みで幾人もの武偵が葬られてきたのだろう。

現にライカの右手のCZ75から、空のマガジンが滑り落ちた。

それと同時に、今まで銃口を上に向けていた左手の銃が的を捉えた。

二つの的が粉々に吹き飛んだ。

「なっ！！！！」

見物人の誰よりも驚いたのは屋台のお兄さんだった。

たぶん、この一瞬で勝負が決まったと思っていたのだろう。

だが、ライカは何事も無いかのように次々と的を壊していく。

左の銃が弾切れになると右の銃を、右手の銃が弾切れを起こすと左手の銃を。

太腿の外側に骨と平行に並んでいるマガジン。

それは片手で弾倉を取りかえることができるように配慮された物らしい。

（あいや、二丁拳銃はこんな風なんもあんのか）

ライカの撃ち方は、弾の流れを止めない。
決して二丁同時撃ちはしない、使わない銃は必ず銃口を上に向けている。

数分後、地面に泣き崩れていたのは屋台の兄さんだった。

「うりゃー、やりました！ どうでしたかコウさん？」

小躍りしながら、駆け寄ってくるライカ。
なんとなくその頭を撫でてやった。

「えへへへ」

犬のように幸せな顔をした。

逆に屋台の兄さんは泣きそうな顔をしている。

いやまあ確かにそうだろう、見たところ状態の良い銃だ。
仕入れるにも相当値が張ったのだろう。

軽く見積もっても40000ドル、日本円で四百万は掛かってい
るはずだ。

これをなくすのは相当痛手だろう。

「ライカ、景品はどないするん？」

「うりゃ？」

「あの銃だよ、お前は欲しくないんか？」

「私は楽しめればそれで良かったんです」

どうやら、ライカは楽しかったらそれで良かったみたいだ。

「あ！」

急に何かを思いついたように手を鳴らす。

「お兄さん、景品の銃はいりません」

「本当か！　ありがとう」

泣いて喜ぶ出店のお兄さん。

「でも、代わりに欲しい物が有るんです……」

ライカが交換に出した条件は、ちょっと変わったものだった。

「うりゆ、これで良しっ」

手に抱えていた、何十枚もの色紙をゴミ箱に入れ終えたライカが息をつく。

交換条件は、『そこにある色紙を全てください』というものだった。

数々の武偵の名前が書かれた色紙は今、ゴミ箱の中にある。色紙を全て回収したライカに、見物人は皆拍手していた。

「面白い奴やな」

「うりゃ？　そうですか？」

時間はそろそろ花火が上がる頃、人ごみが激しくライカの手を引っ張りながら進んでいる。

このままだと、ライカは花火を見ることができない。

145センチのライカでは上を見上げても、周りの大人が壁にな
って見えなのだ。

どこか少しでも開けている場所を探すが見つからない。

そうこうしていると、一発の花火が上がった。
それを皮切りに花火大会が始まる。

「始まってもうた」

「うりゅ」

その時ライカが立ち止まって腕を引つ張った。

「どうないした？」

「うりゅ、あれをしたら、見えるかもしれません」

指差したのは二人の親子。

お父さんに肩車されてる女の子だった。

「断る」

即答した。

誰かに見られたらあらぬ誤解を買開けられる。

「でも、今のままじゃ……見えません」

途端泣きそうになるライカ。

もう、ほとんど小学生だ。

「ああもう！ わかったから」

「やったー！」

切り替え早！！

言ってしまったものは仕方がない。

周りの人に気を使いながら、そっとライカを両肩に乗せる。

「OKか？」

「うりゅ、お願いします」

ライカの体重は軽く、すんなりを立ち上がることができた。

「あんま、はしゃぐなよ？」

「うりゃー、見てください、綺麗ですよ」

ちなみにあんまり見えません。

今ここで首を持ち上げると、ライカの浴衣の裾が捲り上がって大変なことになるからです。

誰にも見られていないことを祈りながら、花火の火薬が炸裂する音に耳を澄ます。

空を彩る花火は、音だけでも充分楽しめる物だった。

「うりゃー、楽しかったです」

「とても、恥ずかしかったです」

そんな俺の言葉も聞かず、ライカは又歩き出そうとする。

「おい、ちょっと待」

待つて、と言おうとしたら急にライカがしゃがみこんだ。

「次はどないしてん？」

「うりゅう、足が痛いんです」

視線を足の方に落とすと、下駄の鼻緒と皮膚の接する部分が赤くなっていた。

簡単に言つと、靴ずれである。

「慣れない服装をするからやな」

康介がそう言つと、少し落ち込んだようにライカが呟く。

「可愛い服装をすればコウさんも喜ぶんじゃないか、と千恵さんが教えてくれました。」

それで選んだんですが……」

そんな理由があつたのか、というか知恵姐さんの根回しだったのかと初めて知る。

自分のために着たと言われると、少し恥ずかしかった。

「あゝ、なんや、可愛いと思うたし、似合つとった。」

帰り道は負ぶつて行くくらいはするわ」

「うりゃ？」

その後、ライカを背中に乗せて寮まで歩いて戻った。
なんとなく、楽しいと思える一日だった。

白銀の騎士

銃の整備と読書に時間を費やし、連休は過ぎて行った。
武偵高はアドシアードの開催期間に入る。

「問題はあれくらいかなー」

双眼鏡を片手に康介が呟いた。
レンズの先に見えるのは武偵高の火薬庫だ。

「もし、テロリストが狙うんやったら確実にここやるな」

いい加減に置かれた弾薬と爆薬、火薬、炸薬。

簡単に調べた限りでは、建物に特殊な加工が施されていない。

誘爆を起こせば火薬庫だけでなく、校舎にも損害が及ぶだろう。

もし、自分が敵ならこの火薬に爆弾を仕掛ける。

世界中の優秀な青年武偵が集まるアドシアード。

そもそも武偵には敵が多い、テロリスト以外にも狙っている人間は数多くいるだろう。

注目の集まる大会会場で事件が発生したら？

それも、事件を解決する『武偵』が大勢いる武偵校で。

ここには、国内外の報道陣が来ている。

問題が起きれば、それこそぞって記事にするだろう。

有ること無いこと関係なしに書いていくはずだ。

もちろん真実を記すことも多い。

「まあ、人が書く物には人の個性が出るっちゆうことやんな」
誰も聞いている人などいないが、あまりにも暇なのだ。

S G 5 5 0 を背中に双眼鏡を手に持つて、康介は屋上にいる。
会場と火薬庫をの両方を見張れる場所だ。

康介が一人なのは理由がある。

遠山と白雪、アリア、ライカはアドシアードの手伝で忙しい。

別に遠山と受け付けの仕事をしてもよかった、だがアリアがそれを許可しなかった。

結局、適当な仕事を午前に入れただけで後は自由。

そして今、こうして一人でいるのだった。

一言でいえば不審者の警備、けれどそんな必要はないかも知れない。
い。

武偵校だって狙われていることは重々承知。
多くの武偵生徒が目を光らせている。

まず、騒ぎを起こそうとは思えないだろう。
では何故こんな処に居るか？

心を落ち着けたかった。

ハイジャックで理子に逃げられ、ベルヴアには返り討ちに合った。
ついこの間も隙を突かれて、ゼッシーベに殺されかけた。

偶然にもアリアやライカが傍にいたので死なずに済んだが……
こここのところ負けてばかりだ。

それが気になって、最近落ち着かない。

唯一、この銃を握っている時間は心を紛らわすことができる。

双眼鏡を降ろして銃を構える。

銃口の先に見える空の色も気分を和ませてくれる。

何の気も無しに照準を火薬庫に合わせると、不思議な人物を見た。
けた。

黒いマントを羽織っているその人間は倉庫の中に入っていく。

その背中には、身の丈ほどの剣が光を放っていた。

（まさか、デュランダル！？）

すぐに携帯を取り出し皆に連絡する。

だが、誰とも繋がらない。

（一人で片付けるか……）

別に問題は無い、相手も一人こつちも一人だ。

一人での作戦行動なんて珍しい事じゃない、銃を背負いなおして
康介は動いた。

——その頃別の場所では——

「ライカさん、時間なので変わりまーす」

「うりゅ、よろしくありがとうございます」

チケットの受付を交代したライカ。

時刻は三時前、少しお腹が減ってくる。

小さい靴を踏み鳴らしながら人混みを歩いていく。
することも無いので大会を観ることにした。

世界中の人たちが各々の技術を競い合っていた。
今から始まるのは拳銃の射撃競技らしい。

（うー、やっぱり康介さんと一緒じゃないと面白くないです……）

競技を見てもつまらなくなって立ち上がる。

寮にでも戻ろうかと考えた時だった、変な感覚が体を駆け巡った。

何かの匂いを感じる。

どこかで嗅いだことのある、懐かしい匂いだった。

その源の姿を探すように、体が勝手に動いて行く。
自分と呼んでいるような気がした。

——地下倉庫にて——

SG550の先に銃剣を付けた状態で康介は廊下を進んでいた。
いつものサブマシンガンSpecterは部屋に置いてきている。

足音を出さないよう慎重に進んでいく。

銃はセミオートにしている。

火薬庫の中でフルオートはあまりにも危険だからだ。
誘爆でもされたら大惨事になる。」

右も左も火薬箱、できればこんなところで銃は撃ちたくない。
その康介の心を読んだかのように相手は目の前に姿を現した。

「お前は白雪ではないな？」

男喋りの女声、そして敵意ある言い方。

「お前がデュランダルってやつか？」

「その名で呼ぶな、人に付けられた名前は嫌いだ」

「別に名前の詳細なんて関係あらへん。お前が敵かどうか問題
やな」

「もちろん、敵だ」

当然のように答えて、相手は剣を構えた。
こちらも銃口を向ける。

「ここで撃てるかな？」

「当たらなければ、どうということはない」

睨み合う二人、互いに相手の隙を窺う。
先に動いたのは康介だった。

一発の銃弾が相手を狙う。
敵は素早く動いてそれを難なくかわした。

爆発物を背中にして迫ってくる。

鋭い斬撃を避けて距離を取りつつ後退。

何とか射線を確保しようとするが相手も巧妙に立ち位置を確保する。

だが、相手の獲物は剣だけ。

間合いにさえ入らなければ斬られることは無い。
加えて狭い室内、相手の斬撃の型も限られてくる。

「しぶといな、だがこの状況で私に勝つ方法は無いぞ」

相当余裕なのか、挑発の言葉も剣撃に混じる。

「銃では私に勝てない、観念するんだな」

距離を詰めて、攻撃の手を緩めない。

相手の剣筋を見極め、背後の柵を足場にして飛ぶ。
相手の振り下した剣は、地面を斬るだけだった。

「なっ!?!」

「銃は鈍器としても使うんだよ! このタコ!」

銃身を握って、ストック部分で相手を強打する。

落下の勢いも上乘せして重い一撃が相手に加わった。

敵は地面に崩れ落ちた。

すかさず拳銃GSRを取り出して相手の頭部に向ける。

引金を引こうと指に力を入れた時だった。

いきなり相手が立ち上がり、腕を伸ばして銃を掴んだ。

「なかなか効いた、だがお前では私にか勝てない」

音を立てて銃が凍っていく。

間一髪のところでは手放したため手は凍らなかった。

相手が懷から短い剣を取り出すのを見て、一気に後ろに飛んだ。壁が背中にぶつかる。

そこに二本の銃剣が飛んできた。

フランス製の銃剣は、康介の右肩と左太ももの傍に刺さる。

「!？」

急いで逃げようとしても体が動かない。

首を動かして見ると体が氷に捕まっている。

「ここで死ぬか？ それともついて来るか？」

剣を構えなおした敵が問いかけてくる。

「屈する気は無い」

「ならば死ね」

ゆっくりと相手が近づいてくる。

この距離で動けない相手を斬るのは造作もない。もはや逃げ道はなかった。

制御不能

相手は充分に歩み寄り、剣を上段に構えた。

「墓で眠る前に教えてやろう、私の名前はジャンヌ・ダルク30世だ」

壁に張り付けられている康介は何も答えない。

「驚かないんだな？」

「ルパンにもホームズにも子孫が居たんや、いまさら驚くことも無い。」

「……いや、一つあるな」

剣を持つ敵の動きが止まる。

「何だ？」

「国を守った聖女と聖剣が闇に染まっている事だ！！」

あたり時間が静寂に包まれた。

「今から死ぬ人間の言葉に耳を傾けても、仕方がないな」

「俺もそうやと思う」

その言葉を聞いた瞬間、剣は振り下された。

それと同時にジャンヌと名乗る敵が横に弾き飛ばされた。

際どい所で駆け付けたライカが体当たりで弾き飛ばしたのだ。着地と同時に二丁の拳銃を構える。

その二丁の銃には銃剣が付けられている。

「新手か……今日は招いてもいない人間が多く来る。巫女を回収せねばなんのに」

悪態をつきながらジャンヌは剣を構えなおす。

ライカも慎重に距離を詰めていく。

右手の銃を相手に向けつつ、一步また一步と近づいていく。

長さではジャンヌの方が有利、だが狭い場所では短いライカの銃剣が有利だ。

相手の隙について至近距離に入って仕留めるしかない。

火薬の詰まった箱を背後にするジャンヌに、距離とタイミングを計っていく。

「ただの武偵に私は倒せん！」

ジャンヌはそう叫ぶと剣を水平に構えて突進してきた。体全体を低くしての突き。

ライカは横に少しだけ体をずらして回転し、その一撃を避ける。相手は自分の間合いの中に入っていた。

素早い突きを繰り出した後で、防御も取れない。

ひねった体の遠心力を加えた斬撃がジャンヌの体に迫る。

「甘いな！」

またしても現れた氷が巨大な壁を作る。

その氷壁から手が伸びるように氷が生まれ、ライカの体を掴んだ。

「不意打ちで私の事を仕留めていれば良かったのだ。
この男を助けるために取った行動が命取りになったな」

氷の壁はいつの間にかライカの全身を包む、巨大な球体となっていた。

「氷の球の中で死ぬがいい」

ジャン又は再び康介に向きなおる。

「お前のために動いた人間が一人死んだな」

「お前はっ！！」

激しい憎悪が全身を激しく動かすが、固い氷の拘束は壊れそうになかった。

「無駄だ、その氷は誰にも壊すことができない」

相手が剣を再び持ち上げた。

その背後には、大きな氷の塊が見える。

ライカはあの中にいる、自分は動けない。

どうする事も出来ない？ ヴェスパのこの俺が？

憎しみを込めて睨みつけるが、どうにもならない。

終わりだと思った時だった、誰かの叫ぶ声が聞こえた。

倉庫の鉄の壁を揺るがすような雄叫びは、固い氷をも粉碎してい

く。

氷塊を壊して姿を現したのは獣の血をたぎらすライカだった。

「貴様、一体どうやって!？」

「……」

戸惑うジャンヌが問いかけてもライカは何も答えない。
その眼は血の色に輝いている。

いきなり走りだし、ジャンヌに飛びかかる。
ただ直線的に野獣のような動きで襲いかかった。

「もう一度、氷の中に閉じ込めてや——」

ジャンヌが手を伸ばした先に氷が生まれていく。
その塊にライカが飛び込んでいく。

巨大な壁となるはずの氷は霞みのように消え去った。
ライカの体に当たる直前で、全ての氷が消滅していく。

「何だ、何が起きて」

驚くジャンヌに掴みかかる。

両手で細い首を絞めながら押し倒した。

ジャンヌに覆いかぶさるようにしてライカは力の限り手に力を込めていく。

普段の無邪気なライカでは考えられない凶暴ぶりだった。

「うっ……あっ……うっ……離……せ」

苦しそうにもがくジャンヌ。

「……？」

何かに気がついたのか猛獣のように血走る眼を扉へと向けた。
ゆっくりと立ち上がり、狩りをする四足の獣けだもののよう体を低く屈める。

ジャンヌが逃げようと気にも留めない。

ただ真っ直ぐに、確実に近づいてくる足音の正体に目を向けている。

戦慄の走る戦場に姿を現したのは赤い髪の少女。

黒い戦闘服をまとったゼッシーベだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3480z/>

緋弾のアリア × 特務零中隊

2012年1月9日19時50分発行